

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第7集

笠原

米沢市都市計画課
まんぎり会
米沢市教育委員会

笛原遺跡 発掘調査報告書

手塚 孝・亀田晃明 編

橋	爪	健	藤	穏	平	廣	夫	雄	誠	之	郎	則	美	明	
菊	地	政	星	忠	正	利	敏	子	崎	木	類	博	一	琢	英
小	松	佳	金	川	青	大	山	吉	口	野	桐	村	重	英	
佐	藤	庄	四	川	大	山	吉	片	木	木	木	田	琢	明	
佐	藤	洋	行	青	青	吉	片	木	木	木	木	田	英	明	
佐々	木	誠	宏	大	大	吉	木	木	木	木	木	田	琢	英	
茨	木	光	裕	山	山	片	木	木	木	木	木	田	英	明	
野	尻	侃	侃	桐	桐	木	木	木	木	木	木	田	琢	英	
安	部	彦	彥	村	村	木	木	木	木	木	木	田	英	明	
伊	藤	和	美	木	木	木	木	木	木	木	木	田	琢	英	
会	田	容	弘	龜	龜	木	木	木	木	木	木	田	英	明	

米沢市都市計画課・まんぎり会・米沢市教育委員会

昭和56年10月

序 文

日頃、当市の文化財行政に市民の皆さまのご協力をいただき、心から感謝申し上げます。

このたび当市中田町笹原地内に下水道終末処理場を建設するに先立ち、同地内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を考古学研究グループの「まんぎり会」にお願いし、このような調査報告書を刊行するはこびとなりました。

この報告書により、いさきかなりとも奈良・平安時代を中心とした古代遺跡を知る参考にしていただければ幸甚です。

最後に、本調査に多大なご協力を賜わりました関係各位に心から感謝申し上げます。

昭和 56 年 10 月

米沢市長 長俊英

序 文

米沢市には、八幡原遺跡群をはじめとして100余の遺跡が確認されておりますが、まだまだその全容を解明するには至っておりません。

その中で、この度新たに発見された『笹原遺跡』が、都市計画課のご協力を得て、考古学研究の若手グループの「まんぎり会」に調査を委託されその調査報告書を刊行する運びとなりました。

この『笹原遺跡』は、米沢でも数少ない奈良・平安時代の遺跡であり、出土した遺構・遺物、ことに木簡や墨書き土器、円面鏡などが出土したことは、この遺跡が当時の役所跡を示めすものと推定されるなどすぐれた成果をあげたことは、考古学関係者、ことに斯界の研究者の方々に多いに益するものと自負しております。

最後に、この調査事業に関係されました宮城教育大学の楠本政助先生をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

昭和56年10月

米沢市教育長 北口二郎



▲ 笹原遺跡、A 台地の遺構全景



▲ SD 3 内 1号木箇出土状況



▲SD 3 内縫出土状况



▲SD 3 内流木出土状况

はじめに

この度、米沢市都市計画課の要請をうけ、当市中田町笹原の遺跡調査を当「まんぎり会」が引き受けることとなりました。

おかげさまで、当市において数少ない奈良・平安期の遺跡ということが判明し、又数々のすぐれた成果をあげることができましたことはひとえに都市計画課並に米沢市教育委員会のご協力の賜物と深く感謝申し上げる次第であります。

ここに笹原遺跡の調査報告書を刊行し、いさきかなりとも米沢の古代史に新たな一頁を加えることが出来得たのではないかと自負いたしております。

今後ともよろしく当会の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げございさつといたします。

昭和56年10月

まんぎり会

会長 手塚 孝

例 言

I 本報告書は米沢市中田町字笠原地内の米沢浄水管理センター造成に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

II 発掘調査は米沢市（市長 長 俊英）の要請によりまんぎり会〔会長 手塚 孝〕が主体となり、工事担当の米沢市都市計画課と保護側の米沢市教育委員会の協議のうえで昭和56年7月16日～9月15日と同年9月30日～10月8日までに実施したものである。

III 調査体制は下記の通りである。

調査総括 手塚 孝

調査主任 亀田 吾明

同副主任 菊地 政信

調査員 橋爪 健、小松 佳子、金子 正廣、佐々木誠宏、佐藤正四郎、まんぎり会々員

IV 調査協力 山口 和雄、星 忠平、楠木 政助、佐藤 鎮雄、酒井 清滋、遠藤 和博、

米沢市教育委員会、米沢市都市計画課、米沢市卸売センター

山形県教育庁文化課

作業員 班長 遠藤 重男

同副 伊藤 清美、我妻 正寿

鈴木 芳徳、本田 利雄、佐藤 庄作、石田 廣、我妻 勇、小方 藤馬

永井 一雄、清水宮之助、田畠 喜雄、安部 一成、安部 利作、鈴木 こう

沢根えいこ、我妻 徳枝、渡部 智子、斎藤 トク、伊藤 幸、渡部ゆり子

事務局 菊地 政信、金子 正廣、色摩美由紀

調査指導 加藤 総

V 本書の作成は手塚 孝・亀田吾明の両者が担当し、編集は手塚・図面は小松佳子・校正は金子正廣がその任務にあたり、まんぎり会々員が補佐した。

本 文 目 次

序 文 米沢市長 長 俊 英

序 文 米沢市教育長 北 目 二 郎

はじめに まんぎり会会长 手 塚 孝

例 言

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と地形	1
III 調査の経過	7
IV 造構の概要	9
1. 台地上の造構	9
a 竪穴住居跡	9
b 土壙	18
c 溝状造構	21
2. 平地状の造構	21
a 溝状造構	21
b 柱穴状造構	29
V 出土遺物の概要	33
1. 出土土器の分類	34
2. 土器調整手法の分類	36
3. 底部内面調整の分類	37
4. 底部切り離し技法	56
5. 各土器群の細別	99
VI 木器・自然遺物	99
1) 木筒	99
2) 農具	100
3) 容器	100
4) 出土植物遺体	112
5) その他の遺物	112
VII 総 括	112
1) 遺跡の性格	112
2) 各土器群の細別と年代	114

挿 図 目 次

原色図版 第1図 笹原遺跡、A台地の遺構全景	
SD3内1号木簡出土状況	
原色図版 第2図 SD3内鍛出土状況	
SD3内流木出土状況	
第1図 笹原遺跡付近の地形図	3
第2図 笹原遺跡周辺の地質図	4
第3図 外の内遺跡出土土器	4
第4図 東江股遺跡出土石剣	5
第5図 笹原遺跡周辺の地形図	6
第6図 笹原遺跡グリッド配図	8
第7図 笹原遺跡ST1平面図	10
第8図 笹原遺跡ST3・ST4平面図	12
第9図 笹原遺跡ST5平面図	13
第10図 笹原遺跡ST6平面図	16
第11図 笹原遺跡ST7平面図	17
第12図 笹原遺跡ST2・ST8平面図	19
第13図 笹原遺跡ST9平面図	20
第14図 笹原遺跡土壙平面図	22
第15図 笹原遺跡柱穴平面図	23
第16図 笹原遺跡SD3平面図(1)A・B区画	24
第17図 笹原遺跡SD3平面図(2)C・D・E区画その1	25
第18図 笹原遺跡SD3平面図C・D・E区画その2	26
第19図 笹原遺跡SD3平面図(4)F・G・H区画	27
第20図 笹原遺跡SD3平面図(5)1～3区画	28
第21図 土器調整手法様式図	35
第22図 笹原遺跡出土土師器環底部拓影図(1)	39
第23図 笹原遺跡出土土師器環底部拓影図(2)	40
第24図 笹原遺跡出土土師器環底部拓影図(3)	41
第25図 笹原遺跡出土土師器環底部拓影図(4)	42
第26図 笹原遺跡出土須恵器環底部拓影図(1)	43

第27図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図2).....	44
第28図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図3).....	45
第29図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図4).....	46
第30図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図5).....	47
第31図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図6).....	48
第32図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図7).....	49
第33図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図8).....	50
第34図	笛原遺跡出土須恵器環底部拓影図9).....	51
第35図	笛原遺跡出土土器実測図1).....	65
第36図	笛原遺跡出土土器実測図2).....	66
第37図	笛原遺跡出土土器実測図3).....	67
第38図	笛原遺跡出土土器実測図4).....	68
第39図	笛原遺跡出土土器実測図5).....	69
第40図	笛原遺跡出土土器実測図6).....	70
第41図	笛原遺跡出土土器実測図7).....	71
第42図	笛原遺跡出土土器実測図8).....	72
第43図	笛原遺跡出土土器実測図9).....	73
第44図	笛原遺跡出土土器実測図10).....	74
第45図	笛原遺跡出土土器実測図11).....	75
第46図	笛原遺跡出土土器実測図12).....	76
第47図	笛原遺跡出土土器実測図13).....	77
第48図	笛原遺跡出土土器実測図14).....	78
第49図	笛原遺跡出土土器実測図15).....	79
第50図	笛原遺跡出土土器実測図16).....	80
第51図	笛原遺跡出土土器実測図17).....	81
第52図	笛原遺跡出土土器実測図18).....	82
第53図	笛原遺跡出土土器実測図19).....	83
第54図	笛原遺跡出土土器実測図20).....	84
第55図	笛原遺跡出土土器実測図21).....	85
第56図	笛原遺跡出土土器実測図22).....	86
第57図	笛原遺跡出土土器実測図23).....	87
第58図	笛原遺跡出土土器実測図24).....	88

第59図	笛原遺跡出土土器実測図25).....	89
第60図	笛原遺跡出土須恵器拓影図(1).....	90
第61図	笛原遺跡出土須恵器拓影図(2).....	91
第62図	笛原遺跡出土須恵器拓影図(3).....	92
第63図	笛原遺跡出土須恵器拓影図(4).....	93
第64図	笛原遺跡出土須恵器拓影図(5).....	94
第65図	笛原遺跡出土木器実測図1).....	101
第66図	笛原遺跡出土木器実測図2).....	102
第67図	笛原遺跡出土木器実測図3).....	103
第68図	笛原遺跡出土木器実測図4).....	104
第69図	笛原遺跡出土木器実測図5).....	105
第70図	笛原遺跡出土木器実測図6).....	106
第71図	笛原遺跡出土木器実測図7).....	107
第72図	笛原遺跡出土木器実測図8).....	108
第73図	笛原遺跡出土墨書き土器実測図.....	110
第74図	笛原遺跡出土古銭拓影図.....	111
第75図	笛原遺跡出土その他の遺物実測図.....	113
第76図	笛原遺跡出土土師器編年図.....	117
第77図	笛原遺跡出土須恵器編年図.....	118
第78図	笛原遺跡遺構全体図1).....	附図 1
第79図	笛原遺跡遺構全体図2).....	附図 2

付 表 目 次

第1表	笛原遺跡竪穴住居計測表.....	29
第2表	笛原遺跡土壤計測表.....	30
第3表	笛原遺跡ピット計測表.....	31
第4表	笛原遺跡出土土器類別表.....	33
第5表	笛原遺跡出土土器の調整分類表.....	36
第6表	笛原遺跡出土壙類・底部切り離し分類表.....	38
第7表	笛原遺跡出土壙類・底部切り離し遺構分類表.....	38
第8表	笛原遺跡壙形土器底部切り離し分類表.....	52
第9表	笛原遺跡出土土器計測表.....	95

第10表 笹原遺跡出土種子分類表	100
第11表 笹原遺跡出土墨書土器分類表	109
第12表 笹原遺跡出土古錢分類表	109
第13表 笹原遺跡出土土師器編年表	115
第14表 笹原遺跡出土須惠器編年表	116
第15表 笹原遺跡出土坏類口徑・高径・底径比率表	119
第16表 笹原遺跡出土坏類土器口徑比率表	121
第17表 笹原遺跡出土坏類土器高径比率表	121
第18表 笹原遺跡出土坏類土器底径比率表	121

図 版 目 次

第一図版	笹原遺跡発掘(1)
	発掘前状況
	発掘前の地鎮祭風景
第二図版	笹原遺跡発掘(2)
	遺構全景 その1
	遺構全景 その2
第三図版	笹原遺跡発掘(3)
	住居跡発掘状況
	住居跡完掘状況
第四図版	笹原遺跡発掘(4)
	S T 1 全景
	S T 2・S T 8 全景
第五図版	笹原遺跡発掘(5)
	S T 3・S T 4 全景
	S T 7 全景
第六図版	笹原遺跡発掘(6)
	S T 1 カマド全景
	S T 4 柱穴の断面状況
第七図版	笹原遺跡発掘(7)
	S K10・S K13断面状況
	同上完掘状況

- 第八図版 笹原遺跡発掘(8)
S D 3 発掘状況
同上断面状況
- 第九図版 笹原遺跡発掘(9)
S T 1 床面須恵器蓋出土状況
S T 8 床面須恵器水瓶出土状況
- 第十図版 笹原遺跡発掘(10)
S D 3 遺物出土状況 その1
S D 3 遺物出土状況 その2
- 第十一図版 笹原遺跡発掘(11)
S D 3 遺物状況 その3
S D 3 流木出土状況
- 第十二図版 笹原遺跡発掘(12)
S D 3 鍔柄出土状況
S D 3 鍔出土状況
- 第十三図版 笹原遺跡発掘(13)
S D 3 木製品出土状況 (木筒)
S D 3 木筒出土状況
- 第十四図版 笹原遺跡出土土器(1)
A群 1 類土器 挿図番号67 遺物番号214
A群 1 類土器 挿図番号66 遺物番号199
A群 2 類土器 挿図番号 2 遺物番号137
A群 3 類土器 挿図番号80 遺物番号205
- 第十五図版 笹原遺跡出土土器(2)
A群 4 類土器 挿図番号79 遺物番号 31
A群 4 類土器 挿図番号90 遺物番号186
A群 5 類土器 挿図番号87 遺物番号 91
A群 5 類土器 挿図番号73 遺物番号195
- 第十六図版 笹原遺跡出土土器(3)
A群 6 類土器 挿図番号78 遺物番号 50
A群 7 類土器 挿図番号92 遺物番号 38
A群 8 類土器 挿図番号96 遺物番号 29

	A群8類土器 挿図番号 99 遺物番号 51
第十七図版 笹原遺跡出土土器(4)	
	A群9類土器 挿図番号 3 遺物番号197
	A群9類土器 挿図番号101 遺物番号189
	A群10類土器 挿図番号23-24 遺物番号193
	A群10類土器 挿図番号 14 遺物番号194
第十八図版 笹原遺跡出土土器(5)	
	A群11類土器 挿図番号 7 遺物番号157
	A群12類土器 挿図番号105 遺物番号 75
	A群12類土器 挿図番号111 遺物番号 65
	A群12類土器 挿図番号107 遺物番号 33
第十九図版 笹原遺跡出土土器(6)	
	A群13類土器 挿図番号 37 遺物番号167
	A群14類土器 挿図番号144 遺物番号 10
	A群14類土器 挿図番号146 遺物番号164
	A群14類土器 挿図番号150 遺物番号 18
第二十図版 笹原遺跡出土土器(7)	
	A群15類土器 挿図番号163 遺物番号 5
	A群15類土器 挿図番号157 遺物番号190
	A群15類土器 挿図番号153 遺物番号 13
	A群15類土器 挿図番号166 遺物番号 79
第二十一図版 笹原遺跡出土土器(8)	
	A群16類土器 挿図番号169 遺物番号104
	A群16類土器 挿図番号167 遺物番号 28
	A群16類土器 挿図番号183 遺物番号 8
	A群26類土器 挿図番号174 遺物番号 30
第二十二図版 笹原遺跡出土土器(9)	
	A群17類土器 挿図番号211 遺物番号174
	A群17類土器 挿図番号171 遺物番号 3
	A群17類土器 挿図番号173 遺物番号 19
	A群17類土器 挿図番号187 遺物番号 181
第二十三図版 笹原遺跡出土土器(10)	

- A群18類土器 挿図番号215 遺物番号213
- A群18類土器 挿図番号219 遺物番号 35
- A群19類土器 挿図番号125 遺物番号 62
- A群19類土器 挿図番号126 遺物番号175
- 第二十四図版 笹原遺跡出土土器⑪
- A群20類土器 挿図番号136 遺物番号 88
- A群20類土器 挿図番号202 遺物番号 42
- A群20類土器 挿図番号132 遺物番号 87
- A群21類土器 挿図番号138 遺物番号169
- 第二十五図版 笹原遺跡出土土器⑫
- A群22類土器 挿図番号199 遺物番号105
- A群22類土器 挿図番号201 遺物番号 16
- 第二十六図版 笹原遺跡出土土器⑬
- B群 2 類土器 挿図番号209 遺物番号 97
- B群 2 類土器 挿図番号 16 遺物番号162
- B群 2 類土器 挿図番号206 遺物番号 36
- B群 4 類土器 挿図番号207 遺物番号 1
- 第二十七図版 笹原遺跡出土土器⑭
- C群 3 類土器 挿図番号 42 遺物番号234
- C群 2 類土器 挿図番号 51 遺物番号128
- 第二十八図版 笹原遺跡出土土器⑮
- C群 4 類土器 挿図番号227 遺物番号236
- C群 3 類土器 挿図番号229 遺物番号271
- 第二十九図版 笹原遺跡出土土器⑯
- D群 2 類土器 挿図番号246 遺物番号278
- D群 2 類土器 挿図番号247 遺物番号261
- 第三十図版 笹原遺跡出土土器⑰
- D群 2 類土器 挿図番号243 遺物番号237
- D群 2 類土器 挿図番号244 遺物番号238
- 第三十一図版 笹原遺跡出土土器⑱
- D群 3 類土器 挿図番号 61 遺物番号170
- D群 4 類土器 挿図番号241 遺物番号235

第三十二図版 笹原遺跡出土土器(1)

- E群1類土器 挿図番号 55 遺物番号131
E群2類土器 挿図番号104 遺物番号 39
E群3類土器 挿図番号137 遺物番号165
E群3類土器 挿図番号 63 遺物番号166

第三十三図版 笹原遺跡出土の墨書き土器(1)

- 墨書き「皿」 A群14類土器
墨書き「舟全」？ A群22類土器

第二十四図版 笹原遺跡出土の墨書き土器(2)

- A群15類土器
A群20類土器

第三十五図版 笹原遺跡出土の墨書き土器(3)

- A群15類土器
A群2類土器

第三十六図版 笹原遺跡出土の木器(1)

R W118

第三十七図版 笹原遺跡出土の木器(2)

R W202
R W113

第三十八図版 笹原遺跡出土の木器(3)

R W110
R W111
R W115
R W112

第三十九図版 笹原遺跡出土の木器(4)

R W119
R W120
R W116
R W114
R W102

第四十図版 笹原遺跡出土の木器(5)

R W117表

R W117裏

第四十一図版 笹原遺跡出土の種子類(1)

うり類

ひょうたん

うり類

第四十二図版 笹原遺跡出土の種子類(2)

炭化米 その1

炭化米 その2

第四十三図版 親子発掘・戸塚山古墳群出土土器

親子発掘参加記念撮影

戸塚山古墳群出土土師器坏

I 調査に至る経過

昭和55年7月、米沢市中田町笹原付近に住宅団地造成の計画が近く実施される運びとなり、事前に当核地における埋蔵文化財の有無を確認するための緊急分布調査の依頼を受けた事に始まる。

昭和55年8月4日、米沢市教育委員会は笹原周辺の現場探査を行ない、分布調査は住宅団地内に限定せず広範囲に実施し、精密なる分布調査を行なってきた。

その結果 中田町字笹原、同台、同北川原、同清水川向、同下ノ在家等の小字が含まれる広範な原野の中央部に、小高い台地上付近に多量の土器片を確認することが出来た。小さな台地は4ヶ所存在し、ほぼ中央に位置する白子神社跡地の台地を中心に多くの遺物が認められたことから、本台地を中心とする集落跡が存在することが予測された。この集落跡の存在する笹原地区は、米沢市都市計画課が昭和50年から土地買収が行なわれ、昭和57年着工予定の米沢浄水管理センター用地136,000m²の範囲に含まれる地域である。ちなみに表採された遺物の時期は、八世紀～九世紀（国分寺下層式～表杉ノ入式）の須恵器や土師器の土器片が中心をなしていた。

このため緊急に関係機関と協議の上、本遺跡を『笹原遺跡』と命名し、山形県教育府文化課へ遺跡発見の手続がとされることになった。

引き続いて同年10月20日には、米沢市都市計画課の要請により、包含遺跡面積を把握するための試掘調査が実施され、調査必要面積として約14,000m²の範囲が算定された。

昭和56年に入り、米沢浄水管理センター造成地に伴なう埋蔵文化財緊急発掘調査が決定し、同年6月に米沢市教育委員会を通して、地元考古学研究団体である「まんぎり会」にその調査が委託され、昭和56年7月15日より同年9月15日までの2ヶ月間に亘る発掘調査が実施される運びとなったものである。

II 遺跡の位置と地形

笹原遺跡は、米沢市中田町の卸売りセンターの北方約200m付近に位置し、最上川の本流松川西岸の自然堤防及び沖積河岸段丘上に残る台地（以下台地と呼ぶ）及びその周辺に立地している。本遺跡付近は、米沢市崖田町笹原字台と呼ばれる如く、本遺跡を中心に4つの台地が隣接して点在し、それぞれ特異な地形を形成している地域である。以下その現況及び地形的特色、関連遺跡等について、その概要を述べることにする。

まず、遺跡の中心をなす台地は、約2,800m²（標高227.36m）の面積を有し、近年までは畠地であったが、現在（昭和56年）は原野をなしており、重機による草地の掘り起こしが数回行なわれ、すでに地表は擾乱されていた。この台地北西部には、白子神社とその御神木とみられる樹令數百年と伝えられる杉の老木があったが、開発計画と同時に神社は移転され、老木は伐採された。この台地をA台地と名付けることにする。

A台地の南西約40m付近に約2,800m²（標高227.06m）のB台地があり、A台地の東側に隣接して約1,000m²（標高225.92m）のC台地がある。更にA台地の東南に約648m²（標高226.49m）の小さなD台地を形成し、最上川本流の松川西岸に大小4つの台地が特異な形で残されていた。

（第1図）

本遺跡の中心をなしているA台地は、地表より約2m付近までは黄褐色粘質シルトがいくつかの層を形成し、その下部に灰黒褐色の砂質シルト層の堆積を観察できたが、砂礫層は全く見られない。その黄褐色シルト層の第2層を切って、国分寺下層式を中心とする8～9世紀の住居跡が確認されており、住居跡内の第1号土壙からは、土師器片に混入して縄文中期の土器片1片が発見されている。このことは、このA台地の地形形成の時期と深かい関係をもつ重要な問題の一つとして見逃すことはできない。

このA台地に対して、B台地の西側3分の1は砂礫が多く、中州の覆りを受けた形跡があり、残る3分の2はA台地に続く旧台地が、河川の侵蝕によって残された残丘ともみられる。

また、C台地の東側半分には中州状の砂礫の堆積層がみられ、西側半分はA台地と同じく、旧台地の残丘とみられる。

それに対して、D台地は完全な中州状の地形を形成しており、D台地北側の東西トレントには不規則な砂礫層が幾重にも堆積しており、たび重なる氾濫の跡が観察された。

C台地とD台地の東側には、60～80cmの比高をもって、松川西岸の自然堤防状の沖積河岸段丘が見られるが、この小段丘はごく新らしい時期に形成されたものと思われ、本遺跡が営まれる8～9世紀頃には、A・C・D台地のすぐ近くまで松川の入江の1つを形成していたものと思われる。

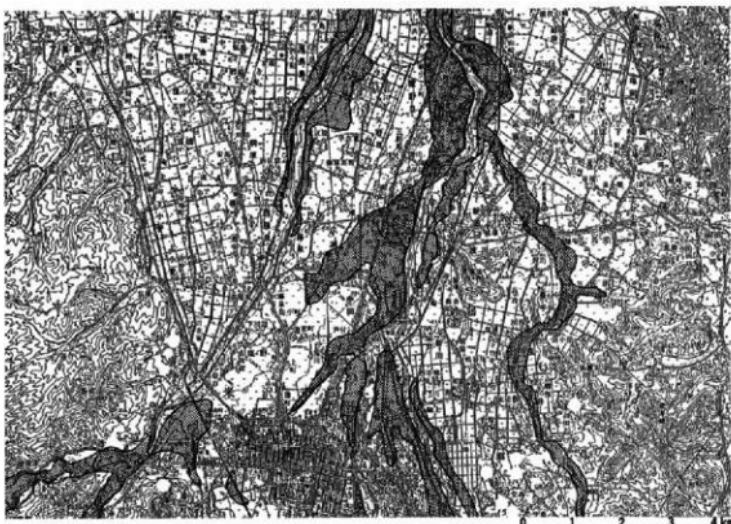
また、A・B台地の西側には、盆地西部を北流する鬼面川の旧河川が形成したと思われる自然堤防及びその氾濫原が広がっており、本遺跡付近は昭和初期頃まで度々鬼面川支流の氾濫の影響を受けていた地域でもある。このことは、本遺跡を中心とする4つの台地周辺の表土下に、旧河川跡を物語る砂礫層が堆積していたことからも想像できる。

ちなみに、昭和45年山形県発行の「米沢一閑」の地質図を見ると、自然堤防堆積物による沖積段丘の砂及びシルトの分布（第2図）は本遺跡を含んでおり、鬼面川上流の館山・成島町方面から、窟田町小瀬・同町中田方面に延びる砂及びシルトの分布は、旧鬼面川水系の流路であったことを物語っているものと思われる。また、本遺跡のある笹原から北方の窟田町付近には、旧河道三日月湖堆積物が残っており、松川及び鬼面川旧河川のかなり強い影響を受けた地域である。^①

以上の諸点から、おそらくこの笹原遺跡の周辺は、松川と鬼面川の旧河川とが合流する氾濫原にあたる地域であったと思われ、ここに現存しているA台地とB・C台地の一部に残る砂礫を含まないシルト状台地は、松川及び鬼面川の旧河川が侵蝕する以前から形成されていた古い冲積台



第1図 笹原遺跡付近の地形図 S 4000分の1



第2図 笹原遺跡周辺の地質図



第3図 外の内遺跡出土土器

地と考えられ、松川東岸に見られる河岸段丘と標高・地層をほぼ同じくしながら、少くなくとも4000年前には、縄文人が居住可能な台地が形成されていたものと思われる。

その後、松川や鬼面川の氾濫と侵蝕によって、現在のA～Dの台地が孤立する形で残され、中でもほとんど氾濫の影響を受けなかったA台地に、本遺跡の好立地条件があったものと思われる。

ちなみに、本遺跡周辺の遺跡分布をみると、そのほとんどが河岸段丘上の台地や河川合流付近の舌状台地上に立地している。

● 戸の内遺跡（第3図）

米沢市窪田町戸の内遺跡は、松川の西岸段丘上にあって、昭和30年頃佐藤庄右エ門氏が畠地耕作の際発見されたもので、昭和37年の分布調査

で筆者が試掘調査を実施した結果、縄文中期中葉の集落跡であることがわかった。

- 遺跡面積 約5,000m² • 時期 縄文中期
(大木8b~9式)

- 東江股遺跡 (第4図)

米沢市最北端の遺跡で、昭和55年4月渡部長栄氏が苗代かきの折石剣を発見、筆者らの調査の結果縄文晚期の遺跡であることが判明した。現在開田されているが、昔西方付近に小台地の墓地があったところで、鬼面川の東岸段丘上に立地している。

- 台坂遺跡

昭和48年7月、下水溝用の板木設置の際、

地元の某氏によって古板の裏より完形に近い縄文式土器が発見され、連絡を受けた橋爪 健氏が試掘調査を実施した結果、縄文中期後葉～縄文後期初頭に亘る集落であることが確認された。

- 遺跡面積 約30,000m² • 時期 縄文中期 (大木10式)、縄文後期 (堀之内I式)

この台坂遺跡は、松川と羽黒川の合流付近に形成された舌状台地の松川東岸段丘上に立地している。

- 戸塚山古墳群

笛原遺跡の東方約700m のところに、置賜一円を眺望できる標高365m (平地との比高120m) の戸塚山がある。山頂に前方後円墳 (全長53m) 1基、ほたて貝式古墳 (全長24m) 1基、円墳1基をはじめとし、南西、南、東の各山麓には、10~30m の円墳が支群をなして137基現存している。昭和57年5月米沢市教育委員会・まんぎり会によってほたて貝式古墳が発掘調査され、人骨・竹製の櫛・鉄製刀子を伴なって石組石棺が検出された。6世紀頃と推定されている。一方、山麓の円墳からは鉄剣や国分寺下層式の内黒環なども出土しており、7~8世紀の古墳が群集している。

戸塚山々麓の古墳より出土した国分寺下層式〔第43図版〕の内黒環と同一遺物を出土している笛原遺跡は、距離的に地形の上からも戸塚山古墳群と密接な関係をもちながら、特異な地形上に立地した重要な集落遺構をもつ遺跡として、更には地質学上の地形形成因の上からも、重要な意義をもつ遺跡として評価されるものと思う。^③



第4図 東江股遺跡出土石剣



第5図 篠原遺跡周辺の地形図

III 調査の経過

調査の委託を受けた「まんぎり会」(手塚 孝会長)は、前年度の分布調査結果に基づいて、白子神社跡地のA台地を中心に発掘調査計画を協議し、昭和56年7月16日より現場の作業に着手した。

まず、測量のために雑草除去の作業から開始し、調査対象面積約14,000m²の範囲にグリットを設定した。基点を遺跡範囲両側に設置し、磁北方向へ152m延長し、基本線として4ヶ所の台地すべてに適用させ、A台地の中心線を基点に東西154m、南北160mに8m×8mのグリットを設定した。作業はこの8mグリットを単位に、遺物採取はその中に2mグリットを基本として調査を進めた。

遺跡の範囲は、地形の上から台地上と平地に分けられるが、台地上の表土は雑草除去のため2~3年前から導入された重機によって削られており、その際に出来た地表の凸凹の整地が粗掘りとしての作業であった。一方平地の粗掘りは、主に重機を用いて6日間で終了した。粗掘りでは特に台地上は、地形的問題、更には表土が浅いため重機使用は危険であり、すべて人力による作業であった。

発掘作業は、上記の台地のほかに点在するその他の台地についても、少量の遺物が表採されているので、これらの台地についても平行して調査を実施した。その結果、通称「カジ塚」と呼ばれているD台地からは少量の遺物が検出されたが、他のB・C台地上からは遺物・遺構の検出は認められなかった。遺物・遺構が検出されたのは、A台地上とA台地の南側の平地に集中したので、作業は主にA台地上と平地に分け平行して行うこととした。

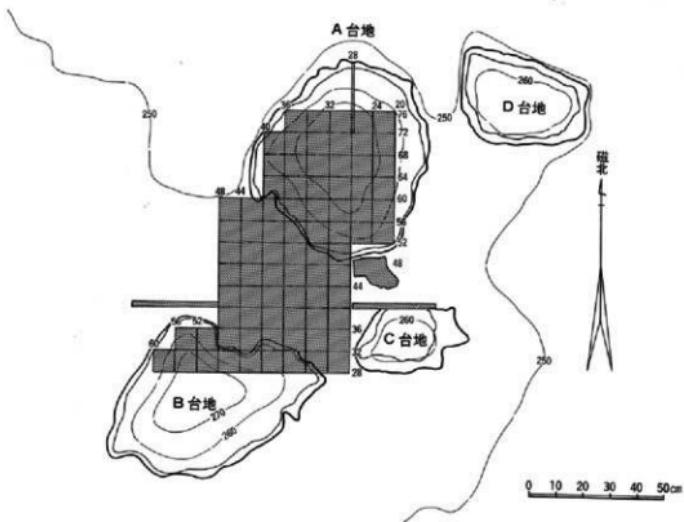
7月下旬までは、台地上の面整理と精査を行ない、ST1・ST2・ST3のプランを確認。平地では表土剥離と面整理が主な作業であった。

8月に入り中旬頃までは、台地上の面整理が主で、ST4・ST5・ST6・ST7・ST8のプランが確認され、ST4・5・6の掘り下げが開始された。一方平地では、面整理の結果ピットが数多く検出され、さらに溝状遺構数基が確認された。この溝状遺構を除いては、すべての平地の遺構掘り下げは終了した。

8月中旬より9月上旬には、台地上のST7・8の掘り下げ、セクション図作成、写真撮影を完了し、平地では遺構の掘り下げが開始された。この間、精査、遺構確認、掘り下げの過程では晴天が続き、台地上の土質から固くひきしまり、井戸掘りと散水の作業も入り精査は難行した。

精査の結果、住居跡9棟、土壙數基を確認し、更に層位確認のためトレンチを設定して約2m掘り下げたが、遺物・遺構は検出されなかった。平地の溝状遺構を除いて台地上と平地の遺構掘り下げはすべて完了する。

9月中旬には、写真撮影、遺構実測図作成を終了し、現地説明会を実施、レベリングの作業に



第6図 笹原遺跡グリッド配図

入る。平地のSD3の調査を除き（この精査は10月に延期）一応の調査が終了した。

10月1日より8日の間、平地のSD3の掘り下げが開始され、木製の柄2本、お盆、板などが出土し、更に4・5日と木筒と鍬が出土した。掘り下げ終了と同時に実測図作成とレベリングを終了し、最終日には現場記者会見を開き、発掘機材・遺物の収納を終え、笹原遺跡の全調査日程は完了した。

調査期間 7月16日～9月20日 延日数73日

9月30日～10月8日

調査対象面積 約14,000m²

内調査面積 約 5,000m²

精査面積 約 3,968m²

IV 遺構の概要

笛原遺跡はこれまでに分布調査を実施した成果より約40,000m²以上にもおよぶ遺跡と判明している。遺跡の範囲には既に先述した様に松川等の河川によって形成された自然堤防が4基の台地化として残っており、遺構もこの台地を中心として分布している。

今回検出された遺構を分類すると自然堤防上の台地とその下の平地の二者に大別され、前者の台地からは竪穴住居跡を中心とした遺構群、後者の平地上からは多量の遺物が出土した溝状遺構と掘立柱を中心とした柱穴群が検出されている。ここでは台地と平野の遺構を分け簡単に検出された遺構の概要について述べることにする。

尚、詳しい遺構の形状及び計測その他は第1表～第3表の各遺構計測表を参照されたし。

1. 台地上の遺構

台地はA～Dの4基が存在するが、遺構が認められるのは標高227.36m、2,800m²の広さをもつA台地のみであり、竪穴住居跡9棟・土壙26基・溝状遺構2基その他が検出されている。

a 竪穴住居跡 (S T 1～S T 9)

S T 1 [第7図]

40-68G (37～40-65～68) に位置する。第Ⅱ層上面（暗黄褐色シルト）を掘り込んで住居跡を構築し、壁は南壁が最深の31cm、東壁と北壁が23cmと浅くなっているものの、床面は平坦で比高差はなく傾斜面を吟味して構築したものと理解される。

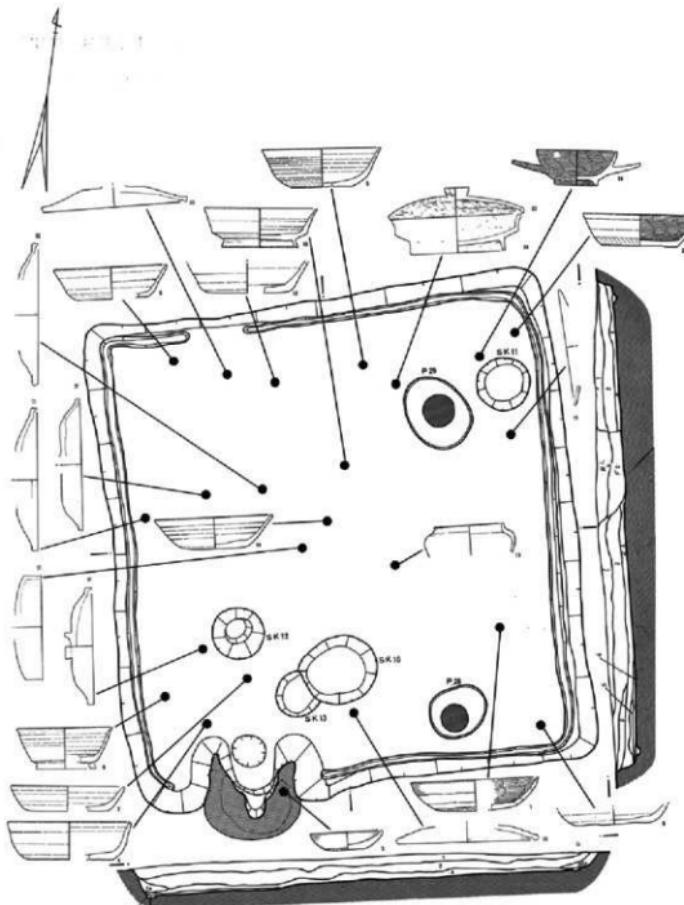
壁は70°～80°と若干外気味に立ち上る特徴を呈し、南壁の西寄りにカマドを設する。カマドは地山(ここでは第Ⅱ層)をそのまま利用し、黄灰褐色粘土及びシルト層それに植物性の纖維を混入させて作り上げている。天井部は崩れて原形を失なっているが、袖の状況から長径130cm、袖長150cmの大きさを呈するものと考えられ、煙道は直上する25cm位、焚口は95cmと算定することが可能である。

今回の住居跡内では本住居跡のみに周溝が確認されており、壁面下に9cm～11cm、深さ5cmを有し、カマド附近と北西部が切れている。特に北壁の西寄りに90cm幅で切れている空間は、前方のカマドと一直線上に位置することから住居跡の入口部分と推測される。

床面は全体的に平坦で固く、柱穴から中央部にかけて、貼り床を施している。柱穴となる柱はP 28とP 29の2本あり、掘り方と柱痕跡が明瞭に確認された。その他、床面には4基の土壙がみられ、切り合いを有するSK 10、SK 13内には多量の焼土が堆積しており、SK 11、SK 12も床面より掘り込んでいることから住居内に伴う施設と考えたい。

出土遺物 [1-14・15-24]

S T 1内より検出された遺物は床面に沿って300点出土されている。このうちの半数以上は土師器によるものが多く、壺、甕類が占めている。復元完形土器は、須恵器18点、土師器6点があり



第7図 笹原遺跡S T 1 平面図

前者の須恵器は蓋 8 点、高台坏 2 点、坏 7 点、臺 1 点がある。後者の土師器は坏 2 点、皿 1 点それに両黒土師器蓋、同取手高台坏、同坏各 1 点がみられ、須恵器と比較して少量である。土師器・須恵器両者の坏類をみると土師器では 1 の様なロクロを使用しない内黒土師器 A 群 1 類土器と同様な両黒坏および取手高台坏があり、古い要素を残している。一方ロクロ使用の土器は少ないが 2 は底部切り離しが (B) 回転ヘラ切りヘラケズリ調整を施こし、外面調整は、ロクロおよび回転ヘラケズリを有している。内面調整は、ヘラミガキを主に $a^7 + a^2 + a^5$ を行い、底部は同じヘラミガキの (a^2) を施する。

大半を占める須恵器は、高台坏 2 点と坏の 2 者が含まれるが 9 を除くと底部切り離し技法は回転ヘラ切りないし、同ケズリ調整が占める。また調整はロクロ調整を主とするが 5・6・11 の下胴部には回転ヘラケズリ調整 (g) が認められている。蓋類では、15 の回転ヘラケズリを併なった B 群 1 類と同様な調整をもつ 16~18 があり、古い要素としてとらえることができ、肩が張り口辺部が内傾する 19・20・22 と平坦な 21 がある。その他頸部が直角に立ち上がる臺形土器 1 点がある。

以上、本住居跡内から検出された遺物から本遺跡最古のグループに位置付けられ、8 世紀中葉と 8 世紀末が含まれている。8 世紀の中葉期に属する土師器 1 は明らかに国分寺下層式に求められ、須恵器の 4・7 は後述木和田古窯跡出土坏に後続する時期とみられる。

S T 2

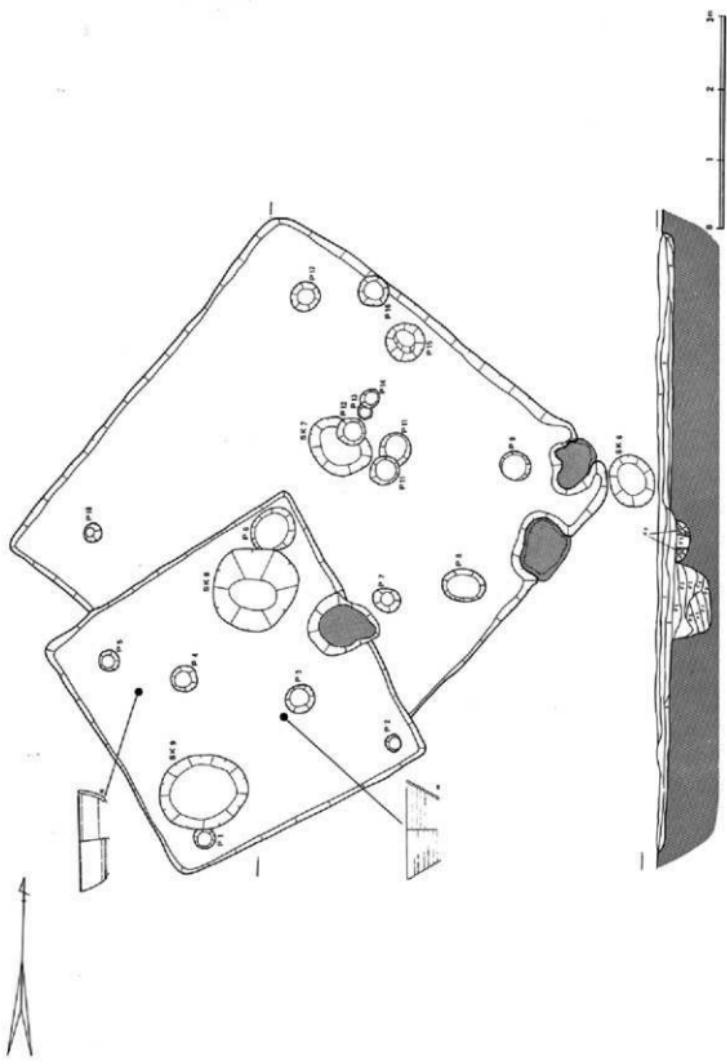
S T 8 を切り込んで確認された。長径 305cm、短径 275cm の長方形プランを呈し、主軸長は東西長で N-20°-W である。壁は S T 8 が廃絶後に構築していることもあって、上端での確認は困難であり、S T 8 の床面からの深さは 8 cm である。S T 8 の平均的な深さは 14 cm であることからすれば少なくとも 20 cm 以上の掘り込みを有していたものと理解される。

カマドではなく、柱穴としては西壁寄りに存在する P 6 と P 23 の 2 基である。遺物は須恵器坏片 10 点と土師器腹片 5 点、同坏 3 点が床面から認められ完形土器がないので詳しい年代は難しいが底部切り離しを糸切り調整 (D) と A 群 15 類土器が存在することから 9 世紀前半と考えることができる。

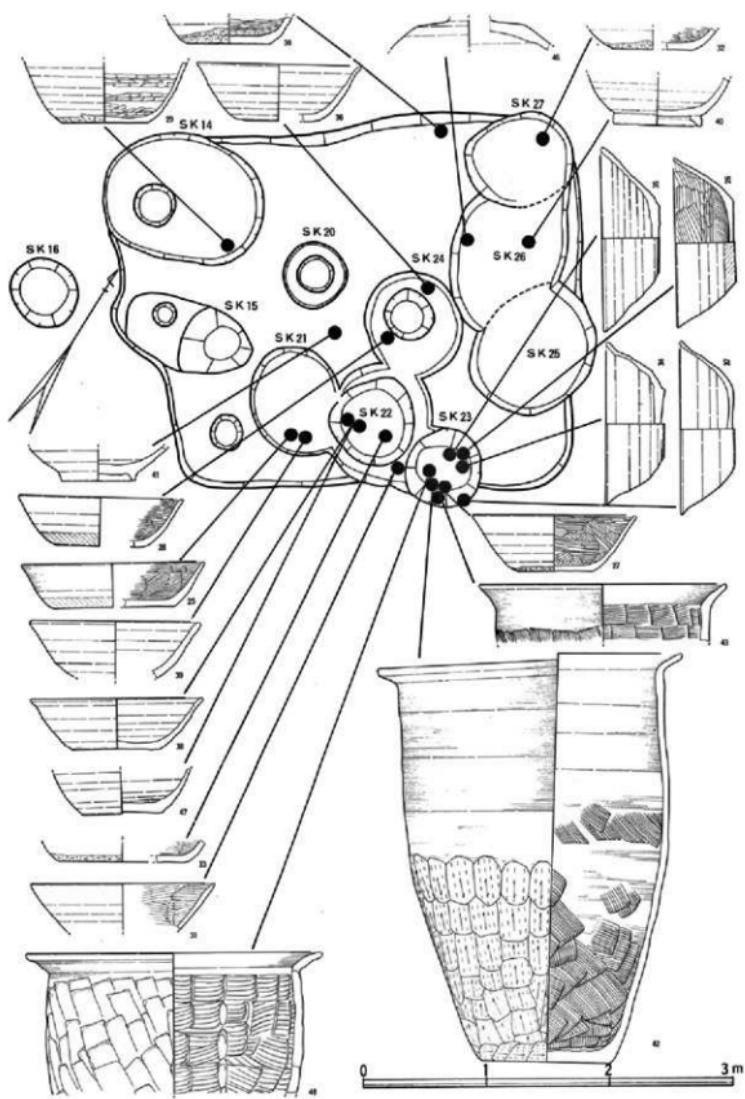
S T 3

S T 8 に隣接する様に位置する。33~38~56~60 の範囲に呈し、南側の大半が S T 4 の構築によって失なわれている。主軸を北西長に向 N-50°-W の傾きをなす。

平面形状はほぼ方形状を示し、主軸長 636cm、短径 320cm で、東隅にカマド痕跡がみられる。カマドは作り替えが行なわれ、旧形がほぼ住居コーナー部に有し 80×70cm、新形が楕円形状の 90×72 cm の 2 基が崩れた状況で認められた。床面は部分的に貼り床の痕跡が認められ、P 3、P 16、P 17、P 18 の 4 本がコーナー付近に柱穴として残っている。その他、床面には住居廃絶後に立てら



第8図 笹原遺跡ST 3・ST 4平面図



第9図 笹原遺跡S T 5平面図

れたと考えられるP 7～P 15の9本の柱穴状ピットが不整形に認められており、貼り床に使用したと考えられる灰色粘土層の混入がみられる。壁は全体的に浅く立ち上り6～11cmを残している。遺物は少なく、須恵器壺A群15類を中心とした計30点が検出されている。

S T 4【第8図】

主軸長をN-30°Wをなす長径420cm、短径413cmの正方形プランの住居跡である。カマドはS T 3と同様に完全に崩れ落ち、東壁中央に100cm×90cmの円形状として残っている。柱穴をなす支柱は4本で、コーナー寄りに設している。

床は平坦で北から南にかけて若干の傾斜をなし、壁は浅く、4～10cm程度であった。また床面にはSK 8、SK 9の二基の土壙とP 4の3基が認められているが、住居跡に伴うものかは不明である。ただし、SK 9に関しては柱穴であるP 1を切っていることから少なくともS T 4構築時よりも新しいものといえる。

遺物は、44・45の他38点の土器破片が検出され、45は破片であるがA群19類の須恵器高台壺と認められ、8世紀末葉から9世紀初頭の位置付けが可能である。

S T 5【第9図】

長径370cm、短径285cmの不整形な長方形プランをなし、造構全体に多量の焼土および木炭と土壙が存在する特異な遺構である。床面を掘り込んで構築されてある土壙は10基認められ、南壁を切っているSK 14・15を含め互に切り合関係を密にする。

本遺跡から検出されている土壙の多くはこの様に住居内部（床面を掘り下げて）に呈するのが多く、住居跡との関連が注意され、本住居跡内土壙も例外でない。

ただし、主軸長をN-30°WにもつS T 5は柱穴、カマド痕跡は確認されなく、これまでに示した住居跡とは異なることは言うまでもなく、住居跡とするよりも、特種竪穴造構とするのが正しいと思われる。

出土遺物【25～43・46～48】

土壙内を中心に須恵器壺9点、内黒土師器9点と壺類が最も多く、土師器甕3点と内黒土師器蓋1点の計22点が検出されている。土師器壺は、不明31を除くといずれも底部上位に回転および（B）手持ちのヘラケズリ調整（C）を施しておらず、内面はヘラミガキ（ $a^1 \sim a^4 \cdot a^7 \sim a^{10}$ ）で仕上げである。須恵器壺はすべてロクロ成形を有するもので、底部切り離しを回転ヘラ切り無調整（A）と糸切り無調整（D）の二者を含んでいる。また土師器の底部切り離しをみると、回転ヘラケズリ（B）と同手持ちヘラケズリ（C）調整さらには糸切りヘラケズリ調整（E）となっており糸切り無調整（D）は含まれていない。同じ須恵器と土師器が共存する中で両者の相異は底部切り離し技法の特質を提起するものと注意される。

土師器甕は頸部から口縁部にかけて、外に強く張り出すのが特徴であり、外面はロクロナデ（f⁴）

斜位のハケメ（d¹），斜位のヘラ調整（c²）の他，42の様に胴部下半を縦位の手持ちヘラケズリ（e¹）同横位（e²）を施すものもある。

一方内面は，斜位ないし横位のハケメ（d²+d³）をロクロナデ（f⁴）後に施してある。土師器の蓋は須恵器と同様に上端部に回転ヘラケズリ（g）を有する特徴をなし，須恵器B群3類土器と同時期と考えられる。年代は土師器壺A群2・3類土器，須恵器壺A群13類土器の年代より8C後～同末期に位置付けられる。

S T 6 [第10図]

S T 1 の西方1.5m にある。ほぼ正方形プランを有し，南北305cm，東西275cm，主軸はS T 1・ST9と同様の南北長で磁北を示す。壁は比較的明瞭に確認され，壁の深さは平均11cmで真すぐに立ち上がる。カマドは西壁中央に位置し，やや南側に傾きを示しながら崩れた状況を呈していた。床面は平坦で全体的に焼けた痕跡を残し，暗赤褐色に変色している。柱穴はP 30～P 31の3本を要し東壁寄りに設している。

遺物 [50～52]

土師器壺と須恵器甕颈部片の2点がカマド付近から検出されている。51は本遺跡で唯一の土器であり，外面調整を横位のナデ後（f²）・縦位のハケメ（d¹）を施し，一部縦位のヘラミガキ（a¹）を呈す。内面調整は斜位のヘラミガキ（a²）を主体に横位のヘラミガキ（a²）・横位のヘラ調整（c²）と斜位のヘラ調整（c³）を輪重部の調整として行い。一部横位のヘラナデ（b²）も施している。

S T 7 [第11図]

34～37-68～71にかけて検出された。長方形プランを示す長径460cm，短径406cmの住居跡は主軸をN=19°Eに向けて柱はP 33～P 36の4本を基本としている。壁は全体的に浅く，最深の北壁で7cm，東で2cmをなすが，比較的良好に残っている。

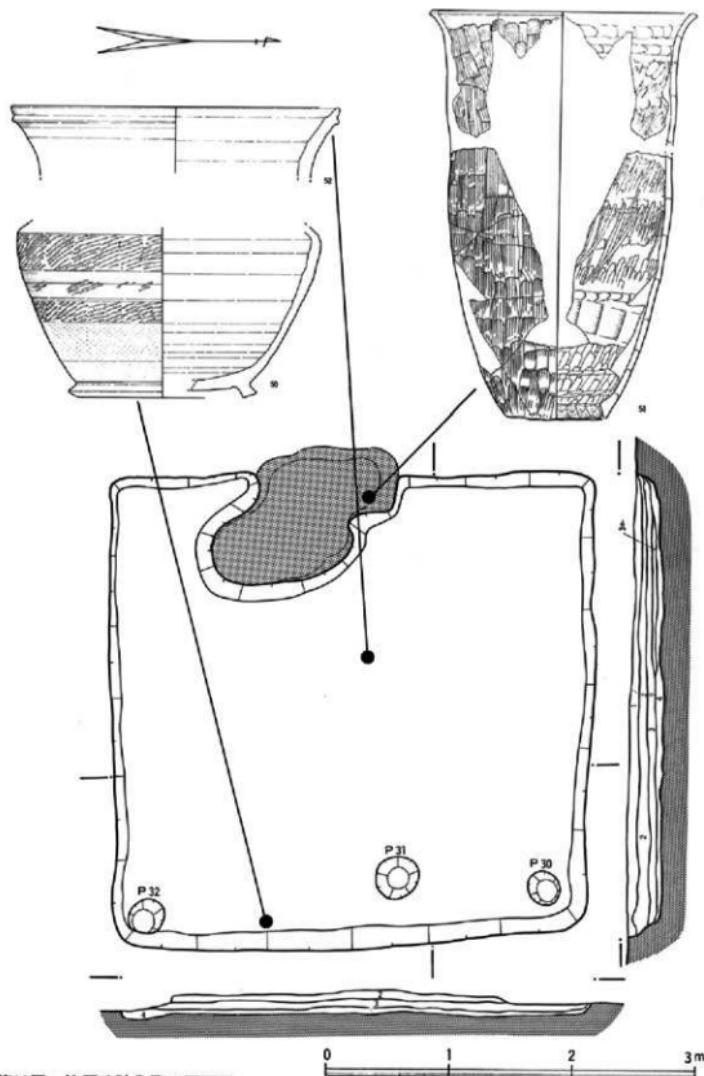
床は固く1～2cmの粘土で整地（貼り床）を施し，南から北にかけてゆるい傾斜を有している。

遺物 [1～4・49・53～56]

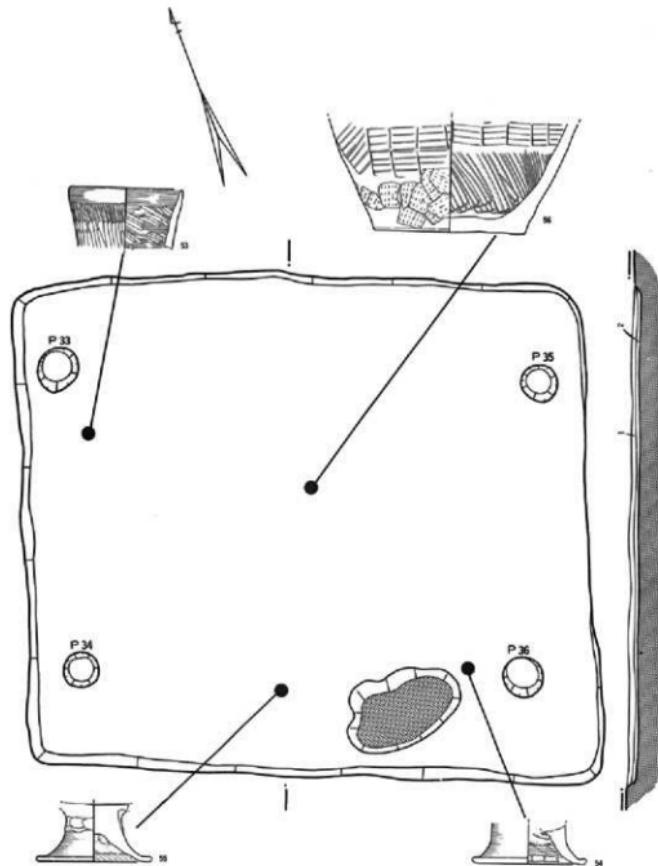
内黒土師器壺1点と同器台脚部2点，同鉢形土器1点それに須恵器甕の下胴部1点が検出されている。土師器壺は外面を横位のナデ（f²）から横位のヘラミガキ（a⁷）同斜位（a⁹）を施し，内面も同様にヘラミガキを主体にa²+a³+a⁴+a⁷で仕上げており，A群1類に分類される。器台は外面を横位のナデ（f²）と接合部をユビナデ（k），内面をロクロナデ（f⁴）+ヘラミガキ（a⁹）と回転ヘラケズリ（g）それにヘラ調整（c²）を加えている。

須恵器の甕下胴部はハケメ手法を中心に（d²+d³）用い，外面の底部付近を継ないし，斜位のヘラケズリ（e¹+e²）で調整を有している。

時期は壺から想定し，8世紀後半と位置付けるのが妥当と考えられる。



第10図 笹原遺跡ST 6 平面図



0 1 2 3 m

第11図 笹原遺跡S T 7 平面図

S T 8 [第12図]

今回検出された住居跡では最大規模をなし、南北700cm、東西680cmを有する。住居の北西部にはS T 2 が切り合っており、切り合い関係と遺物の年代からS T 8 が古く、廃絶後にS T 2 が築造されたことは既に述べた通りである。柱穴は抜き取られているため、柱痕跡等は確認出来なかつたが覆土の状況が人工的な堆積を示すP 24・P 26が推測され、S T 1 と同様の2本単位を呈する可能性がある。その他柱穴のピット及び土壤が床面に沿って認められているがSK2・SK18・SK5・SK4・SK3とP26を除く他は住居廃絶後に位置するものとみられる。

床面は固く、部分的に貼り床の痕跡と南壁周辺に焼けた痕跡を確認することができた。壁は全体的に浅く10~17cmを測る。カマドは取り除かれているため、その存在は認められないが、南壁東寄りに真赤に焼けた100m×60cmの楕円形状の焼土分布がかつてのカマド位置と思われる。

遺物 [57~63]

土師器壺1点、須恵器蓋1点、同壺3点、同水瓶1点それに円面鏡1点の計7点が東壁を中心と検出されている。土師器壺は回転ヘラ切り手持ちヘラケズリ調整(c)の底部切り離しをなすもので、外面はロクロナデ(f⁴)から底部位に手持ちのヘラケズリ(e²)を加え、内面はヘラミガキ(a²)後に黒炭化処理を行なっている。須恵器壺はヘラ切り無調整(A)の切り離しを有する59・60の2点と同ケズリ調整(B)を有するものが含まれ、Bをなす底辺には回転ヘラケズリ調整(g)を施している。61は口辺部が欠損しているもののほぼ完形を示し、頸部に二条の凹線と胴部、それに頸部接合部にそれぞれ凹線を配し、他は回転ヘラナデ(i)とロクロ調整を加えている。

63は底部切り離しを静止糸切りを有する円面鏡と考えられる。58は回転ヘラケズリ調整(g)をなすB群2類須恵器蓋であり、土師器壺はA群2類、須恵器蓋はA群12類に比例され、8世紀後半に属するものと考えたい。

S T 9[第13図]

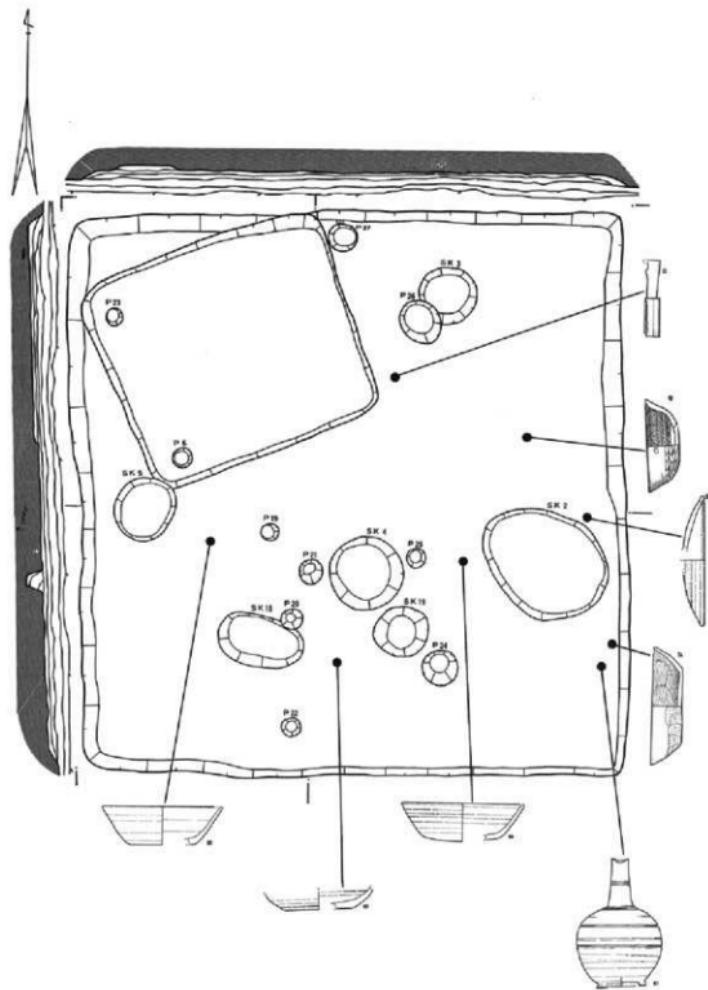
ほぼ正方形の南北404cm、415cmをなす。西壁よりに柱穴であるP 37~P 39とカマド崩れ痕跡が残っている。壁の立ち上りは75°と直線的であり、西側から東側にかけてゆるい傾斜度をもつ。

遺物 [64・65]

丸底を有する壺の底部片と器台の2点が床面から検出されている。壺は外面調整を横位のナデ(f²)を用し、底部位から下胴部にかけて横位のヘラ調ないし、同ヘラケズリ(c²+e²)を有している。器台は外面調整を横位のヘラミガキ(a²)・内面を横位のナデ(f²)がみられる。

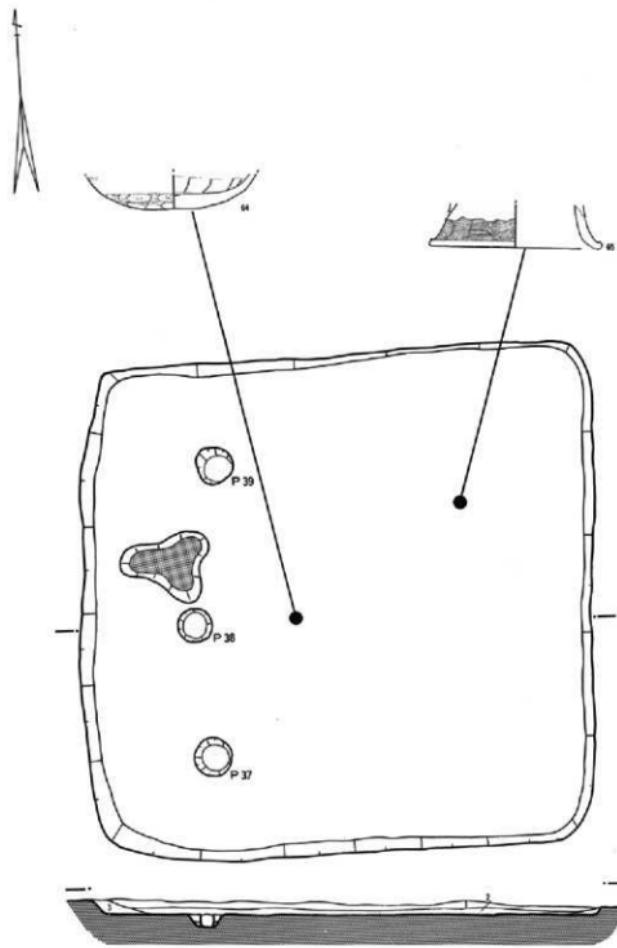
b 土壌 [第14図]

住居内を中心に27基ある。S T 5 の様に10基存在するものも有り、形状、規模は多様であるが長径387cm×短径325cmの楕円形を有するSK1や焼土・木炭粒を多量に含むSK2・10・13・14



第12図 笹原遺跡ST2・ST8平面図

0 1 2 3m



第13図 笹原遺跡S T 9 平面図

0 1 2 3m

15・17・19-27と自然堆積を示し、遺物のまったく含まないSK1・3・4-9・12-18は明らかに区別する必要がある。

c 溝状遺構 (SD1・SD7)

A 台地の東端部に幅60cm~105cm、深さ20cm~38cmの不規則に南北方向にのびているSD7とST1の西北に幅20cm~27cm、長さ140cmの浅い小規模な2基がある。SD7からは「大」のヘラ書きを有した土師器と須恵器鍋、須恵器甕各1点の他80点の土器片が得られている。

2. 平地上の遺構

溝状遺構5基と柱穴64基の計69基が検出されている。

a 溝状遺構

SD3 [第16図~第20図・第79図]

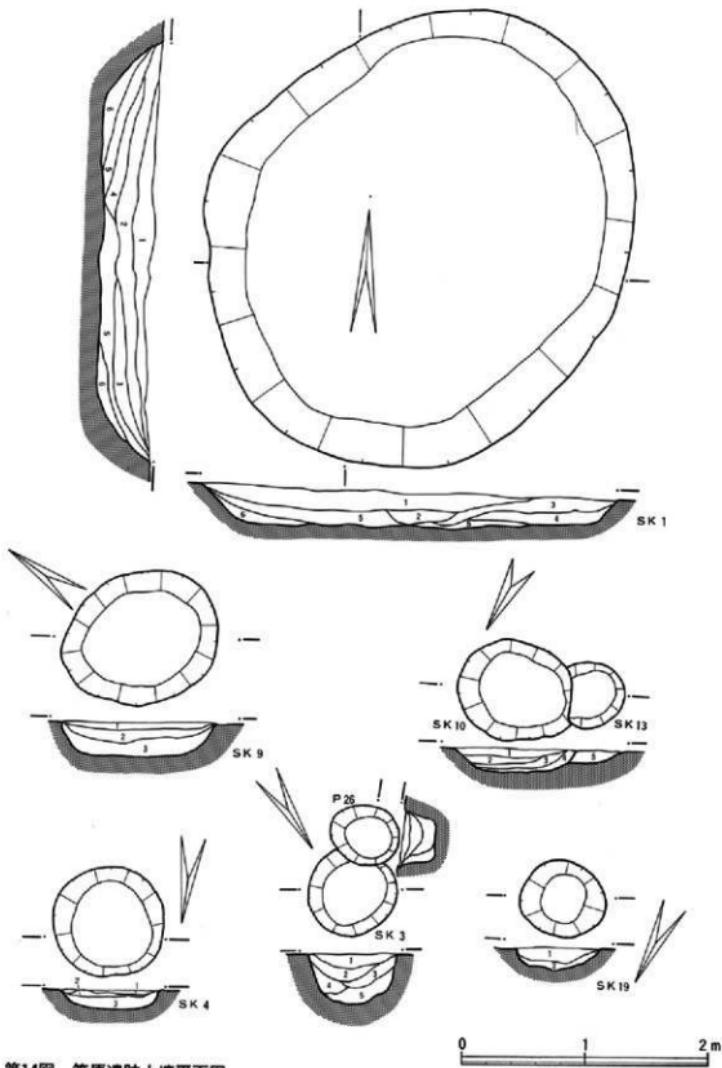
西から東方向に細長く位置するもので、幅180cm~260cm、深さ65cm~202cmの不規則な状況を有している。溝は調査上の都合と西に行くに従って遺物の量が微量になることから西軸グリッドの40Gまでの調査にとどまったが、さらに西方向に広がることは言うまでもない。

さて今回のSD3と称する溝は底面のいたる所に穴を作り175点の完形土器と30点の木器を含み、溝底に堆積していた。この穴は川の流れによって出来る。落ち込み穴であり、水の流れがある程度の速度を有することによって生じる現象である。従って本構は常に一定の水量を西から東へ放出したことがうかがわれる。

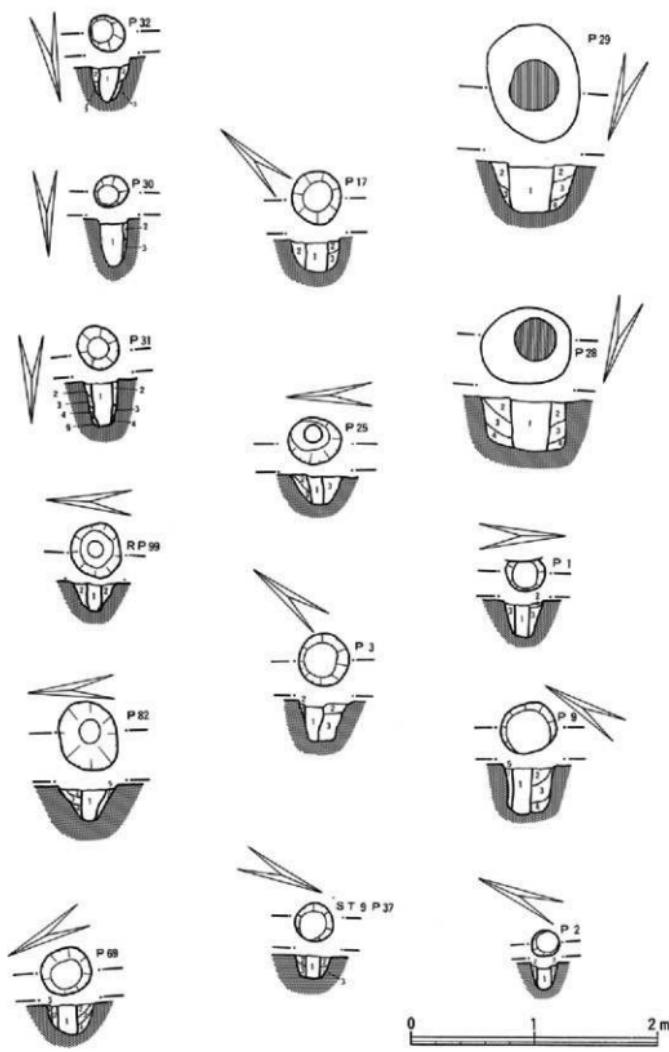
また、19-28・44-50の調査によって、深い落ち込みをもつ入江状の旧最上川とSD3の合流点を検出し、旧最上川から運搬(もしくは流れ込んだ流木木材)された木材と木簡3点を含む多量の遺物が発見されており、すでに最上川が本遺跡に接する様に流下したことをうなづけるものである。

溝内の層序は基本的に7枚に分れ、このうちの5層~7層より多量に遺物が検出されている層位は次の様であり、1層を除く2~5層は、溝が廃絶した後(もしくは水の流れが治まった後)に堆積したものと考えられる程度、時間を経過した時点での際に木炭、焼土とともに磨滅した土器片が流れ込んだものと推測される。5~7層出土の遺物は本遺跡が機能した時点で廃棄された遺物と考えられる。

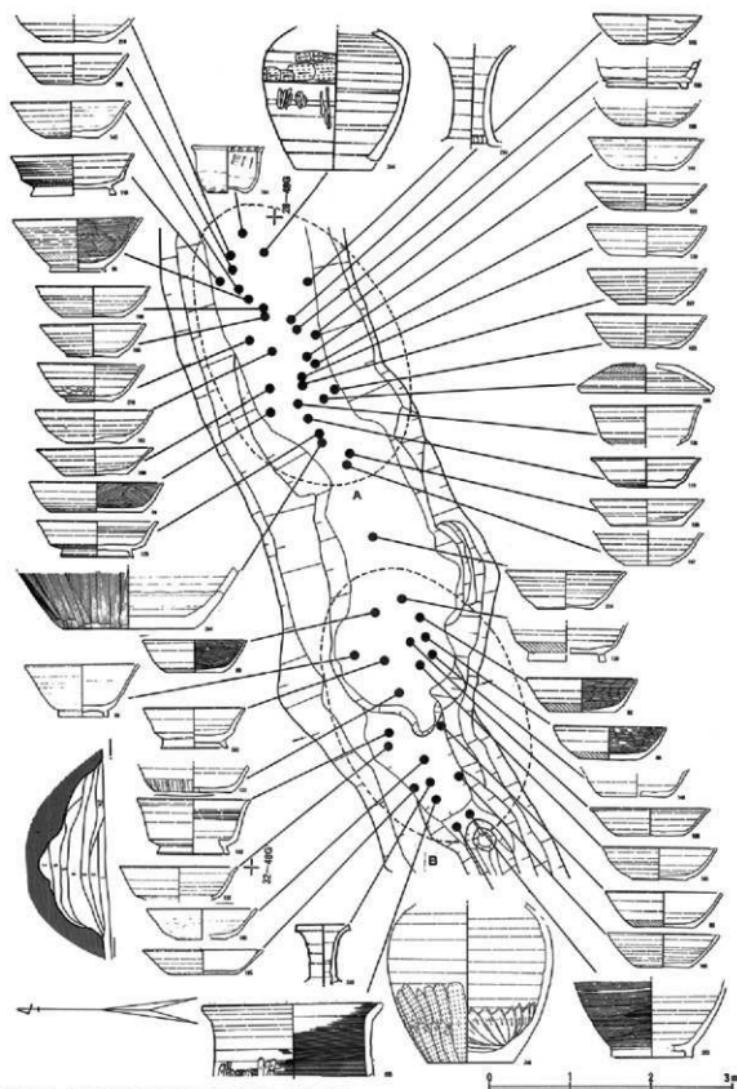
1層	暗灰褐色泥質土	水田耕作土
2層	暗黄褐色シルト層	小量の木炭を霜降り状に含む。磨滅土器片、須恵器混入
3層	暗黒褐色木炭層	地山のシルトと木炭が混合し磨滅した土器が混存する。
4層	暗灰褐色泥質層	小量の砂層と磨滅した土器片を含んでいる。
5層	暗茶灰褐色粘質層	シルトおよび砂礫を部分的に含む。
6層	暗黒褐色泥炭層	多量の木炭と小量のシルト、砂を含んでいる。
7層	暗黒灰褐色泥断層	小量の木炭と多量の有機物を含む



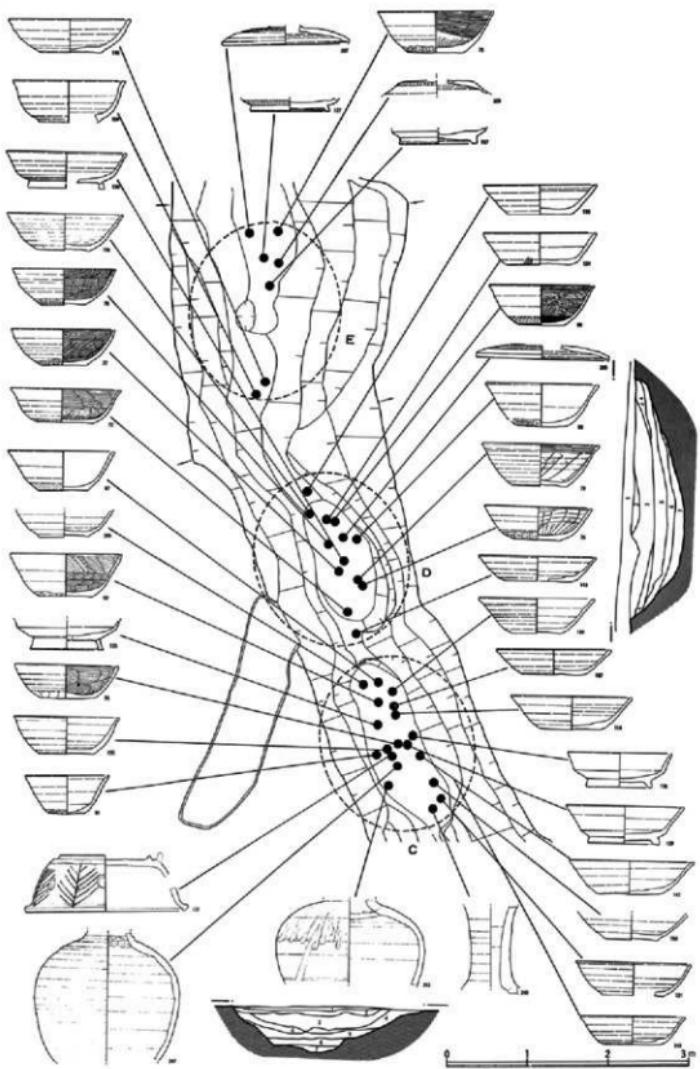
第14図 笹原遺跡土壤平面図



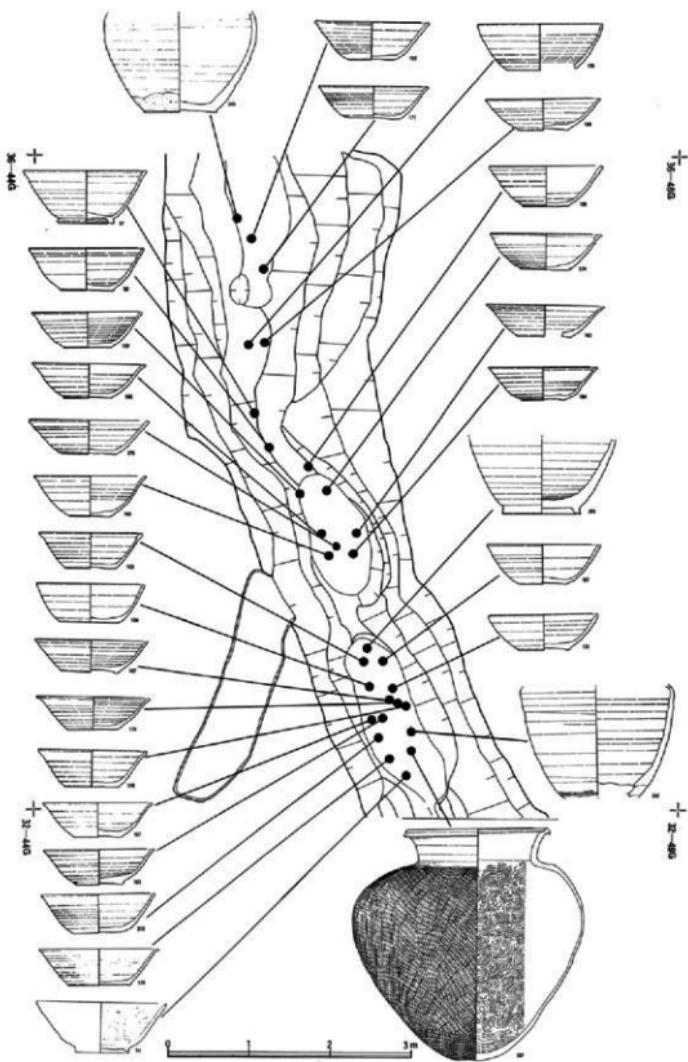
第15図 笹原遺跡柱穴平面図



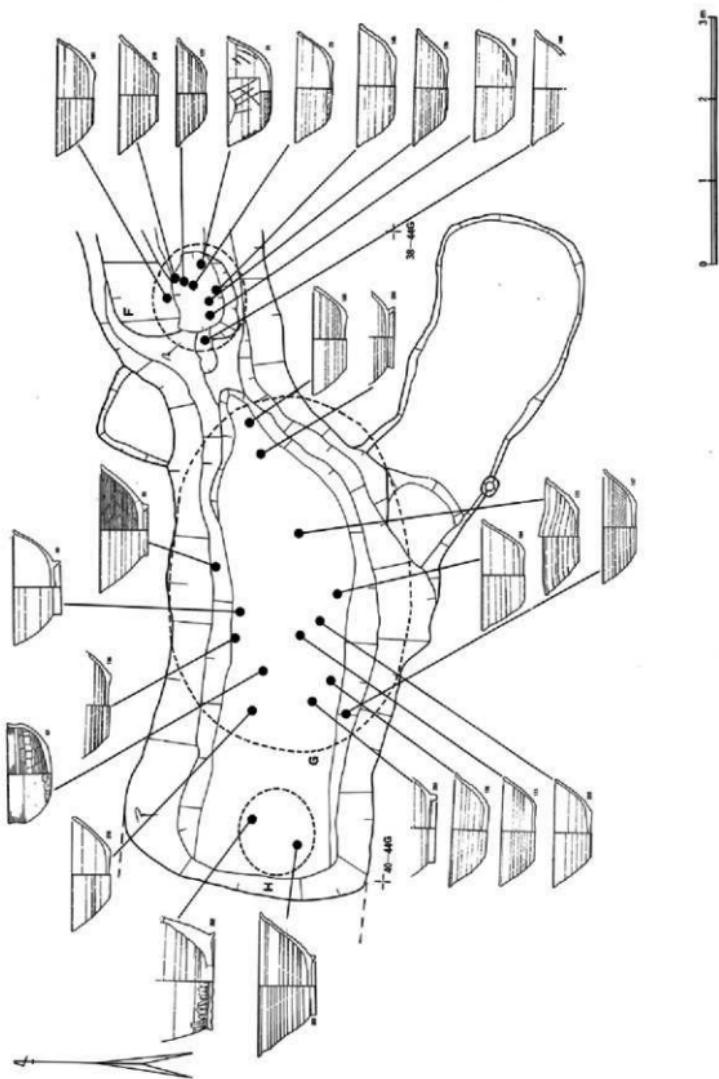
第16図 笹原遺跡SD 3平面図(1)A・B区画



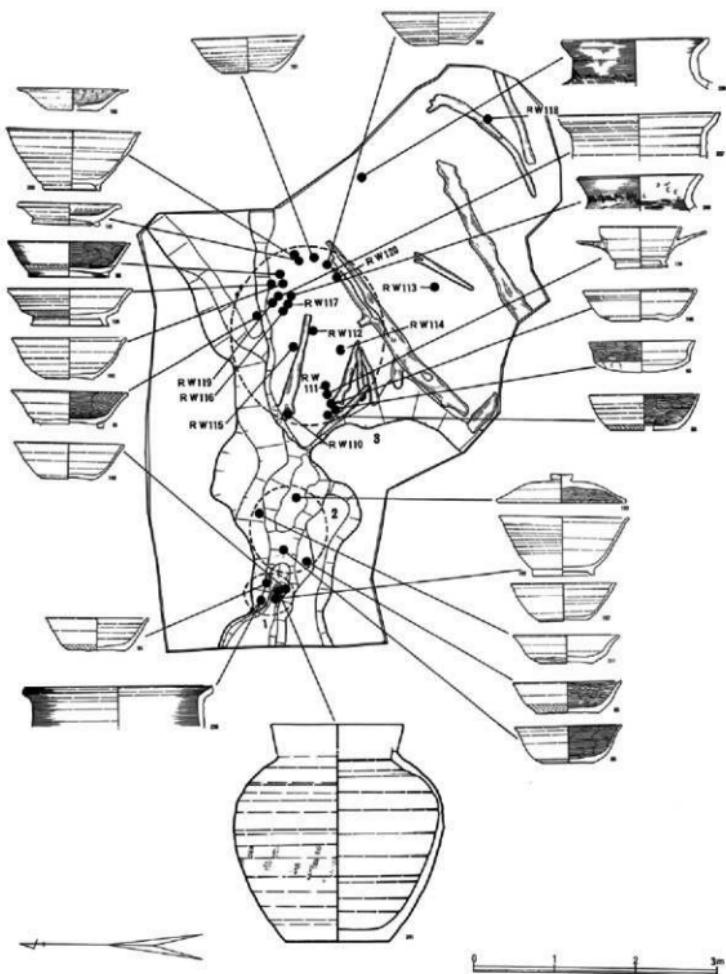
第17図 笹原遺跡SD-3平面図(2)C・D・E区画その1



第18図 笹原遺跡SD 3 平面図3)C・D・E区画その2



第19図 妻原遺跡SD 3平面図(4)F・G・H区画



第20図 笹原遺跡SD 3平面図(5)1～3区画

SD 2・SD 4～SD 6

いずれも3～10cmと浅い掘り込みをもつ溝状遺構であり、SD 2とSD 4がSD 3を切って構築している。遺物はSD 4から形態器壊5点が得た以外は検出されなかった。

b 柱穴状遺構

42～48・32～38・36～40・41～44の二箇所に亘って分布する。平面形状が円形ないし、不整円形状を有するものが多く、最大の30cm～59cm最小の29cm～11cmとまちまちである。深さも同様で3cm～38cmをなしているが、中央に柱痕跡を示す「アタリ」が大半に残っている。層位は、1の柱痕跡の状況から掘立てを呈する建物の存在を考えられるものの柱間や、棟数を把握するまでには至らなく、今回はあくまでも柱穴群としておくにとどめておきたい。

第1表 笹原遺跡竪穴住居跡計測表

遺構名	出土地区	形状	方位	長径 (m)	短径 (m)	深さ(cm)	カマド	床面	支柱	出土遺物	備考
ST1		方形		6.00	5.80	東23、西29 南31、北23	長径 130cm 袖長 150cm 南壁西隅	貼り床 周溝有	2本	第35図1～14 第36図15～23	
ST2		長方形		3.65	2.75	東8、西8 南7、北7	ナシ		2本		
ST3		方形		6.95	6.90	東10、西11 南7、北8	東南壁隅 90×72cm 崩れ	貼り床 の痕跡有	4本		ST4に 切られ る
ST4		方形		4.20	4.13	東9、西5 南4、北10	東壁中央 100×90cm 崩れ		4本	第39図44・45	ST3を 切る
ST5		不整長 方形		3.70	2.85	東9、西5 南8、北5	不明		不明	第37図25～41 第38図42・43 第39図46～48	
ST6		方形		3.65	2.75	東12、西11 南11、北10	西壁南隅 170×100cm 崩れ		3本	第39図50 第40図51・52	
ST7		長方形		6.60	6.06	東2、西5 南9、北7	南壁中央 崩れ	貼り床	4本	第39図49 第41図53～56	
ST8		方形		7.00	6.80	東12、西15 南10、北17	南壁東隅にカ マドの痕跡有		不明	第41図57～63	
ST9		方形		4.15	4.04	東14、西5 南12、北7	西壁中央 長径 60cm 袖 55cm 崩れ		3本	第41図64・65	

第2表 笠原遺跡土壤計測表

遺構名	出土地区	形 状	長さ(cm)	深さ(cm)	底 位	出土遺物	備 考
SK 1			長径 37 短径 35	37	平 塌		
SK 2	S T 8	橢円形	長径 155 短径 130	5	平 塌		
SK 3	S T 8	円形	長径 71 短径 70	37	平 塹		
SK 4	S T 8	円形	長径 91 短径 89	15	不 整		
SK 5	S T 8	円形	長径 82 短径 72	5	平 塹		
SK 6		橢円形	長径 80 短径 65	27	平 塹		
SK 7	S T 3	橢円形	長径 98 短径 73	20	平 塹	P 12に切られる	
SK 8	S T 4	不整円形	長径 122 短径 118	54	不 整	P 6を切る	
SK 9	S T 4	橢円	長径 130 短径 106	33	平 塹		
SK 10	S T 1	橢円形	長径 92 短径 81	17	平 塹		
SK 11	S T 1	橢円形	長径 74 短径 64	22	平 塹		
SK 12	S T 1	円形	長径 66 短径 64	50	平 塹		
SK 13	S T 1	円形	長径 54 短径 46	12	平 塹		
SK 14	S T 5	橢円形	長径 123 短径 105	10	平 塹	第37図29	
SK 15	S T 5	橢円形	長径 119 短径 55	7	不 整	R P 99 25cm×25cmのピット有り	
SK 16		橢円形	長径 57 短径 50	27	平 塹		
SK 17							

遺構名	出土地区	形 状	長さ(cm)	深さ(cm)	底位	出土遺物	備 考
S K 18	S T 8	楕円形	短径 109 長径 62	5	平 坦	第37図25 ・39	
S K 19	S T 8	不整円形	短径 70 長径 61	15	平 坦	第37図33 ・38・37	
S K 20	S T 5	円形	短径 52 長径 50	5	平 坦		中央に33cm×30cmのピット有り
S K 21	S T 5	楕円形	短径 88 長径 75	9	平 坦	第37図25 ・39	S K 22を切る。
S K 22	S T 5	楕円形	短径 100 長径 85	17	平 坦	第37図33 ・38・47	SK 23-SK 24-SK 21に切られる。 70cm×68cm, 25cm×30cmのピット有り。
S K 23	S T 5	円形	短径 65 長径 60	22	平 坦	第37図26 34・35・37 第38図42-43	R P 95~98 S K 22を切る
S K 24	S T 5	円形	短径 55 長径 75	6	平 坦	第37図28 ・36 第39図48	S K 22を切る 40cm×35cmのピット有り
S K 25	S T 5	円形	短径 110 長径 80	8	平 坦		S K 26を切る
S K 26	S T 5	楕円形	短径 93 長径 88	9	平 坦	第37図40 第39図46	SK 25-SK 27に切られる
S K 27	S T 5	円形	短径 88 長径 75	11	平 坦	第37図32	S K 27を切る

第3表 篠原遺跡ピット計測表

遺構名	出土地区	長さ(cm)	深さ(cm)	備 考	遺構名	出土地区	長さ(cm)	深さ(cm)	備 考
P 1	S T 4	34×33	30	住居主柱	P 13	S T 3	22×20	13	P 14に切られる
P 2	S T 4	23×20	21	住居主柱	P 14	S T 3	28×25	12	
P 3	S T 3	45×44	33	住居主柱	P 15	S T 3	56×53	15	
P 4	S T 4	40×38	34		P 16	S T 3	46×45	13	
P 5	S T 4	32×29	22	住居主柱	P 17	S T 3	42×40	32	住居主柱
P 6	S T 2	26×25	15	住居主柱	P 18	S T 3	26×25	6	住居主柱
P 7	S T 3	41×33	21		P 19	S T 8	20×20	20	
P 8	S T 3	54×47	17		P 20	S T 8	27×24	23	S K 18を切る
P 9	S T 3	45×38	35	住居主柱	P 21	S T 8	30×30	36	
P 10	S T 3	45×41	18		P 22	S T 8	22×21	24	
P 11	S T 3	50×45	21	P 12に切られる	P 23	S T 2	21×20	12	住居主柱
P 12	S T 3	49×42	23		P 24	S T 8	45×43	29	

遺構名	出土地区	長さ(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	出土地区	長さ(cm)	深さ(cm)	備考
P 25	S T 8	24×22	21		P 60	44-36G	18×17	15	
P 26	S T 8	57×47	30	S K 3 を切る	P 61	44-36G	32×30	21	
P 27	S T 8	36×34	22		P 62	44-36G	25×?	3	
P 28	S T 1	73×60	44	住居主柱	P 63	44-36G	15×12	7	
P 29	S T 1	94×72	41	住居主柱	P 64	44-36G	32×27	18	
P 30	S T 6	29×25	27	住居主柱	P 65	44-36G	25×21	19	
P 31	S T 6	36×35	44	住居主柱	P 66	44-36G	25×20	15	
P 32	S T 6	30×28	28	住居主柱	P 67	44-36G	45×37	7	
P 33	S T 7	35×32	25	住居主柱	P 68	44-36G	32×30	20	
P 34	S T 7	30×29	24	住居主柱	P 69	40-36G	40×40	38	
P 35	S T 7	30×30	23	住居主柱	P 70	44-40G	25×20	6	
P 36	S T 7	32×30	19	住居主柱	P 71	44-40G	55×50	4	P 70に切られる
P 37	S T 9	30×30	28	住居主柱	P 72	44-40G	33×30	23	
P 38	S T 9	28×36	12	住居主柱	P 73	48-40G	57×55	22	
P 39	S T 9	30×29	23	住居主柱	P 74	44-40G	28×?	18	P 77に切られる
P 40	40-44G	18×17	23		P 75	44-40G	28×20	21	
P 41	40-44G	30×23	39		P 76	44-40G	30×28	6	
P 42	40-44G	15×12	26		P 77	44-40G	35×30	13	P 74を切る
P 43	40-44G	13×12	23		P 78	40-36G	30×28	25	
P 44	40-44G	20×18	25		P 79	40-36G	25×24	17	
P 45	40-44G	40×38	38		P 80	40-36G	30×25	29	
P 46	40-44G	12×11	11		P 81	40-36G	29×?	19	P 82に切られる
P 47	40-44G	21×20	16		P 82	40-36G	59×46	31	
P 48	40-44G	20×15	12		P 83	40-36G	23×22	12	
P 49	40-44G	20×18	20		P 84	48-40G	46×30	29	
P 50	40-44G	13×12	9		P 85	48-40G	30×25	20	
P 51	40-44G	17×15	16		P 86	48-40G	30×30	9	
P 52	40-44G	15×11	18		P 87	48-40G	34×32	45	
P 53	40-44G	20×15	22		P 88	48-40G	21×20	8	
P 54	40-44G	27×20	22		P 89	48-40G	34×33	28	
P 55	40-44G	26×25	25		P 90	48-40G	46×34	12	
P 56	40-44G	26×24	24		P 91	48-40G	17×13	20	
P 57	40-44G	35×35	21		P 92	48-40G	50×49	20	
P 58	44-36G	27×25	17		P 93	48-40G	28×23	20	
P 59	44-36G	14×11	23		P 94	48-40G			

遺構名	出土地区	長さ(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	出土地区	長さ(cm)	深さ(cm)	備考
P 95	40-36G	32×28	27		P 100	40-44G	28×25	18	
P 96	40-36G	21×18	12		P 101	40-44G	23×22	16	
P 97	40-36G	37×31	17		P 102	40-44G	23×19	17	
P 98	40-36G	25×24	15		P 103	40-44G	15×15	12	
P 99	40-44G	45×40	33						

V 出土遺物の概要

笛原遺跡から出土した遺物は「ばんじゅう」A型を使用した整理箱で100箱あり、その大半は遺構内からの検出によるものである。遺構は既に指摘している様に住居跡を中心とする遺構群（A台地）と柱穴群それにS D 3を中心とする遺構群（平地）の二者に分けられ、前者の住居跡内からは65点の完形土器が認められた。後者の平地遺構はS D 3と称した溝状遺構よりの遺物が多く172点の完形土器の他、木器30点と炭化米等による有機物が多量に検出されている。

特にS D 3内の遺物は本遺跡出土の68%を占め溝内の堆積層内に第5層～第7層の3枚に遺物の分布が確認されており、年代区分を吟味する上でも重要な資料となる。

1. 出土土器の分類

今回検出された254点の土器群をみると、焼成および製作過程の相違より土師器、須恵器、赤焼土器の3グループに大別される。主体は須恵器が占め、环形土器を中心に163点、次いで土師器83点が認められ、赤焼土器に比例される土器群は僅か8点であった。

ここでは出土された土器群を环形土器『A群土器』、蓋形土器『B群土器』、變形土器『C群土器』、壺形土器『D群土器』、その他を『E群土器』と便宜的に類別し、土器調整手法や杯類を中心とした底部切り離し技法、同底部調整の細分とS D 3の層位関係それに住居内遺物との類似性等を加味しながら順次説明を加えて行きたい。なお各群における数量は下記の第4表の通りである。

第4表 笛原遺跡出土土器類別表

	A群土器		B群土器	C群土器	D群土器	E群土器	その他
	环	高台	蓋	變	壺	皿	
土師器	8	3	0	12	0	1	5
内黒土師器	34	9	4	0	0	3	1
両黒土師器	0	1	1	0	0	0	3
須恵器	99	26	14	5	15	0	4
赤燒土器	8	0	0	0	0	0	8
合計	149	39	19	17	15	4	11
							254

2. 土器調整手法の分類 [第21図]

篠原遺跡の土器類の調整を細分すると表面の調整（外面調整）と土器内部の調整（内面調整）それに底部の調整（底内外面調整）と分けることができる。この中で底部の調整は壊形土器（詳しくは壊類）の様な切り離し調整『底部外面調整』と底部内面調整に大別され、前者に関しては後に詳しくふれるのでここでは省略する。

さて、調整手法（順位）を分類すると第21図に示した11グループが考えられる。最初のグループは、ヘラ状もしくは棒状工具を用いて特に『ミガキ』効果を高めるための調整方法で a^1 ～ a^{10} の10タイプがみられる。 a^1 は縦位の平行ヘラミガキ、 a^2 は同横位のヘラミガキ、 a^3 は同斜位のヘラミガキ、 a^4 は a^3 の変形で扇状のヘラミガキ、 a^5 は重複する格子目状のヘラミガキ、 a^6 は小さく連続する貝状のヘラミガキ、 a^7 は縦位、横位、斜位等の単状ヘラミガキ、 a^8 ～ a^{10} は同じ方向を複数に亘って調整する手法で a^8 は縦位、 a^9 は横位、 a^{10} は斜位のヘラミガキである。

次のグループは主に土師器壊形土器内面の調整に多く用いられる手法であり、板状工具を押付けて器面を調整するヘラナデ b であり、 b^1 は縦位のヘラナデ、 b^2 は横位のヘラナデ、 b^3 は斜位のヘラナデとした。

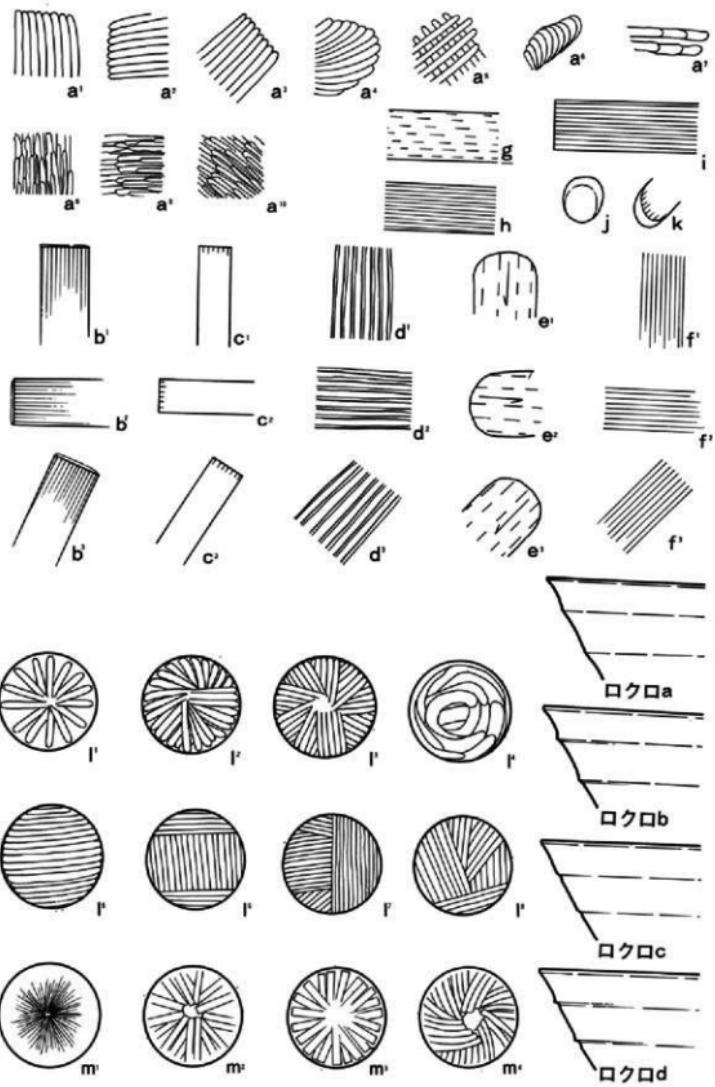
cグループは b と同様な工具を用いて調整を施すが、刃部を鋭利にした状態をもって、器面を強く押し付ける様に調整する手法である。従って、 b の様に内面調整は少なく、壊形、壺形、壊形土器他の胴部～底部にかけて多く用いられ、後述のヘラケズリに近い効果を意図とした調整でありヘラ調整とした。 c^1 は縦位のヘラ調整、 c^2 は横位のヘラ調整、 c^3 は斜位のヘラ調整とする。

dグループは、竹櫛状もしくは刷毛状の工具を用いて、土師器の甕や壺形土器の内面、外面を調整するに最も多くみられる手法である。 d^1 は縦位のハケメ、 d^2 は横位のハケメ、 d^3 は斜位のハケメと分けられる。

eグループは、土師器、須恵器をとわず種々な器種に際して用いられる手法であり、ナイフ状のヘラないし、竹状の工具でケズリ取る調整法である。特に器面の底部の調整から胴下半部に多く大きく変形した箇所の調整に役く立つものとみられ、手持ちヘラケズリとした。 e^1 は縦位の手持ちヘラケズリ、 e^2 は横位の手持ちヘラケズリ、 e^3 は斜位のヘラケズリに細分される。

fグループとしては、常に中心的な調整法として用いられるもので、布や皮、指等を用いて器面を調整するナデの仲間である。 f^1 は縦位のナデ、 f^2 は横位のナデ、 f^3 は斜位のナデとし、土器の最終的な調整を要する際に多く用いられる。同様手法でロクロ形成によるナデ（ロクロナデ）は f^4 とした。

回転（ロクロ回転）を要して行う調整手法としては次の g ～ i ・ f^4 がある。最初は回転ヘラケズリを用いて調整するものであり、壊の底辺や、底部それに蓋の上部、須恵器の甕や壺の胴下半部から底部にかけて施される場合が多い。平均的なプロポーションを作り出す最も適した調整



第21図 土器調整手法様式図

手法でgとした。

ハケメ状の工具をもって回転調整するグループがhの回転ハケメ（カキメ）である。須恵器の壺や土師器の壺に多く施こされ、内外面のゆがみやプロポーションを整形するために用いられるものである。

最後のiグループも基本的にはhと同様な効果を狙った調整手法で、前述のbないしcの工具を用いて回転整形する方法である。主に須恵器の壺形土器に多く、図24他の様にタタキ痕を消す際にも施こされる場合がある。従来はiの手法をロクロ痕ないし、ロクロナデと分類してたものである。iは明らかにf⁴他とは異質な手法であり、回転ヘラナデとする。

最後のグループとしてj・kがある。両者とも指もしくは棒状を用いて調整を施すものであり、jは土師器の器台や須恵器の壺形土器の接合部分調製にみられるオサエツケである。kも同様であり、指によるナデを中心としたグループである。

第5表 笠原遺跡出土土器の調整分類表

土師器					須恵器					
	A群土器	B群土器	C群土器	D群土器	E群土器	A群土器	B群土器	C群土器	D群土器	E群土器
a グループ	◎	○	△	△	◎	+	+	+	+	
b グループ	△	+	○	◎	+	+	+	+	+	
c グループ	△	+	◎	◎	+	+	+	△	+	
d グループ	+	+	◎	◎	+	+	+	△	+	
e グループ	◎	△	◎	◎	+	+	+	△	△	
f グループ	◎	◎	◎	◎	◎	+	+	△	◎	
g グループ	◎	△	△	+	+	○	◎	◎	◎	
h グループ	+	+	○	○	+	+	+	○	○	
i グループ	+	+	△	+	+	+	+	◎	◎	
j グループ	+	+	△	△	+	+	+	+	+	
k グループ	+	+	△	△	+	+	+	+	+	

◎ 多く認められる △ 微量認められる

○ 小量認められる + 猥んどない

3. 底部内面調整の分類

土師器壺、特に内部を炭化処理を呈した所謂『内黒土師器』の多くは内面の調整を丹念に施すものが大半を占め、磨き効果を高めることによってより良質な製品を生み出すことになる。

ここでは本遺跡から検出された内黒土師器壺95点(破片を含む)のうち、底部内面の明瞭な68点を細分し、底部内面調整の分類基準と年代(時期)的特徴を考えてみたい。

底部内面調整には調整工具の異りから次の二通りに分けることができる。前者は棒状もしくはヘラ状工具を用いたものでf¹～g¹の8タイプがみられた。

ℓ^1 は放射状にある一定の間隔を有しながら底部中心に向けて調整する手法であり、第5層内、第6層内、第7層内より各1点づつみられる。

ℓ^2 は ℓ^1 と基本的に同様であるが、重ねる様に間隔を詰めた放射状ヘラミガキで、第5層内2点、第6層内1点の計3点がある。

ℓ^3 は多状のヘラミガキを放射状に移傾させる手法で、ST5内1点と第7層内2点がある。

ℓ^4 は底部縁片から中央にかけて「の」字状に巻き込む様にヘラミガキを行う手法であり、第7層内から2点検出されている。

ℓ^5 はヘラミガキによって同方向に調整を行う手法であり、第5層内からの1点のみである。

ℓ^6 は ℓ^5 を施した後に反対方向の両端に平行ヘラミガキを用いたもので、ST5内1点、第6層2点がある。は ℓ^4 ～ ℓ^6 がSD3内での第6層、第7層、ST1、ST8、ST5から認められ、古い要素を示す特質があり、 ℓ^1 ～ ℓ^3 は第5～第7層とある程度の幅を呈して行なわれてある。

一方ヘラ調整を中心としたm¹～m⁴も同様であり、特にm¹を有するグループはST5内と第6層内に集中して検出されている。底部内面手法の年代は資料が少ないことから詳しい年代決定は難しういが、後述する土器群の時期を前後して付け加えておく。

8世紀中葉以前 ℓ^5 8世紀中葉～9世紀初頭 ℓ^1 ～ ℓ^3

8世紀中葉～8世紀末葉 ℓ^4 ～ ℓ^6 8世紀後葉～9世紀以降 m¹・m³・m⁴

8世紀末葉～9世紀初頭 m²

*いずれも代表的なものであり、かならずしも妥当とは言えない。

4. 底部切り離し技法

ロクロ成形によって土器をロクロ回転台から離脱する方法として、糸による切り離し（糸切り）とヘラ状工具を用いて切り離す（ヘラ切り）の2通りの技法がある。

笠原遺跡からは明瞭に切り離し技法が判る219点を対象に整理し切り離し手法を7グループに細別することが可能であった。

第1のグループは、ヘラを用いて切り離し、調整を加えない。回転ヘラ切り無調整『A』とする。

第2のグループは、ヘラを用いて切り離し、その後に回転ヘラケズリ調整を加えたもの。回転ヘラ切り回転ヘラケズリ調整『B』とする。

第3のグループは、ヘラを用いて切り離し、その後に手持ちのヘラケズリ調整を加えたもの。回転ヘラケズリ手持ちヘラケズリ調整『C』とする。

第4のグループは糸を用いて切り離し、その後に調整を加えないもの。糸切り無調整『D』とする。

第5のグループは糸を用いて切り離し、その後に回転ヘラケズリ調整を加えたもの。糸切り回

転ヘラケズリ調製『E』とする。

第6のグループは糸を用いて切り離し、その後に手持ちのヘラケズリ調整を加えたもの。糸切り手持ちヘラケズリ調整『F』とする。

この調整手法は、土師器を主とする土器群と須恵器群とは同じ年代層において明らかに異なることが指述される^⑤。SD3の最下層第7層において、須恵器は切り離しを回転ヘラ切り無調整(A)・回転ヘラ切りヘラケズリ調整(B)を中心にするのに対し、土師器は回転ヘラ切り無調整を有するものは皆無であり、加えて回転ヘラ切りヘラケズリ調整(B)・回転ヘラ切り手持ちヘラケズリ調整(C)を中心としている。一方土師器に主体的に施されている回転ヘラ切り同手持ちヘラケズリ調整(C)をなすものは須恵器の手法には存在しないものである^⑥。

第6層においては、須恵器の7層に多くみられた回転ヘラ切り無調整(A)はなくなり、回転糸切り無調整(D)が圧倒的に多く呈し、僅かにヘラを中心としたBとEが混在するにとどまる。

一方、土師器は回転糸切り同ヘラケズリ(E)を多く有しながら、ヘラを中心とした(C・B)が共存する特徴がみられる。

第5層では、須恵器が回転糸切り無調整(D)のみになり、土師器も同様の回転糸切り無調整(D)を中心にしながら小量のヘラ切りをもつ(B・C)と糸切り後に回転ヘラケズリを用いた(E)も存在する。

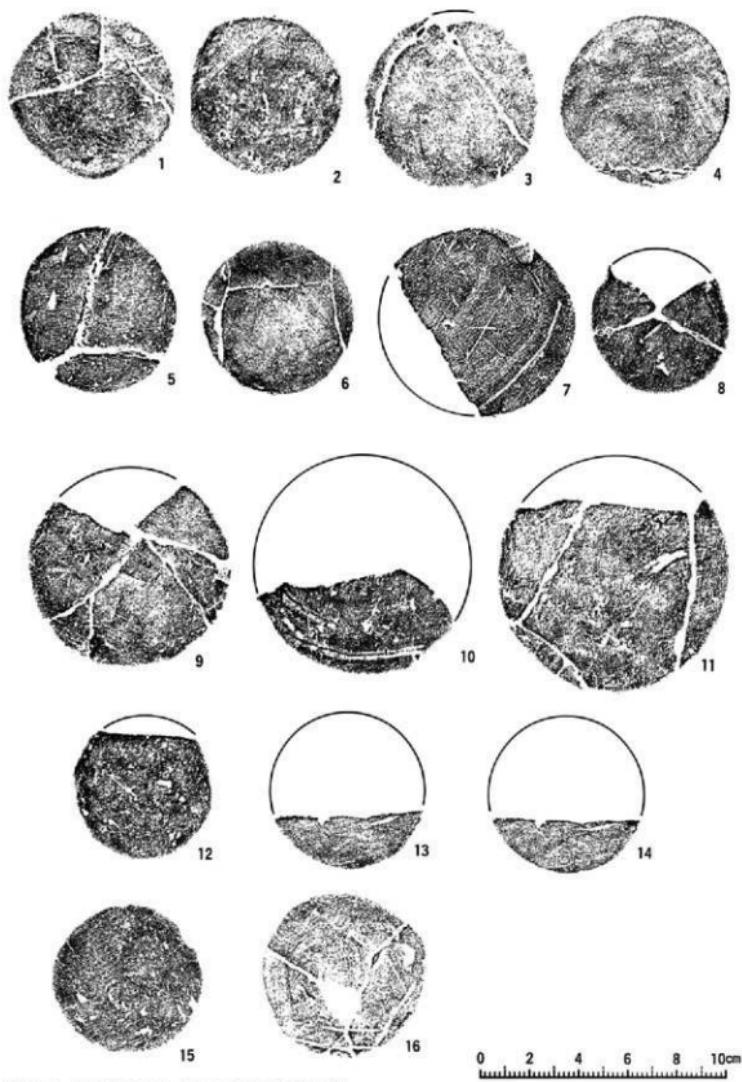
さらに笛原遺跡出土の坏類を層位的に比較して、底部切り離し状況を整理すると下記の分類表の通りである。

第6表 笛原遺跡出土坏類・底部切り離し分類表

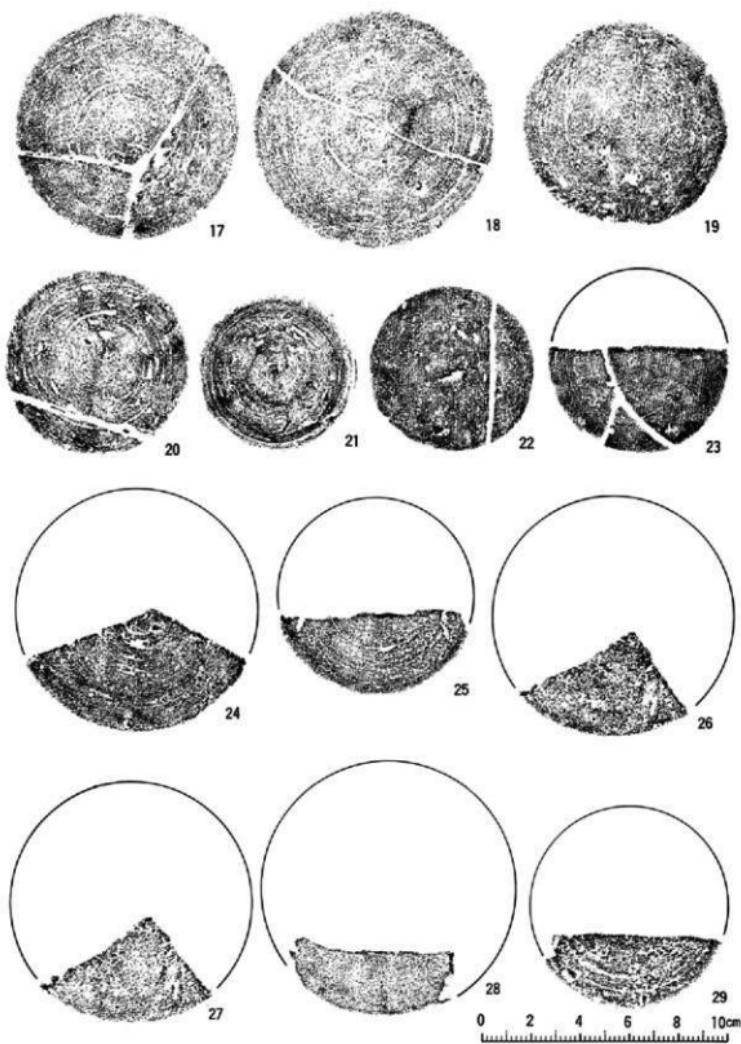
◎土師器坏	切り離しB	切り離しC	切り離しD	切り離しE	切り離しF	その他
総数69点	14点	20%	15点	22%	18点	26%
					17点	25%
					2点	3%
					3点	4%
◎須恵器坏	切り離しA	切り離しB	切り離しE	切り離しD		
総数165点	43点	26%	20点	12%	98点	59%
					4点	2%

第7表 笛原遺跡出土坏類・底部切り離し遺構別分類表

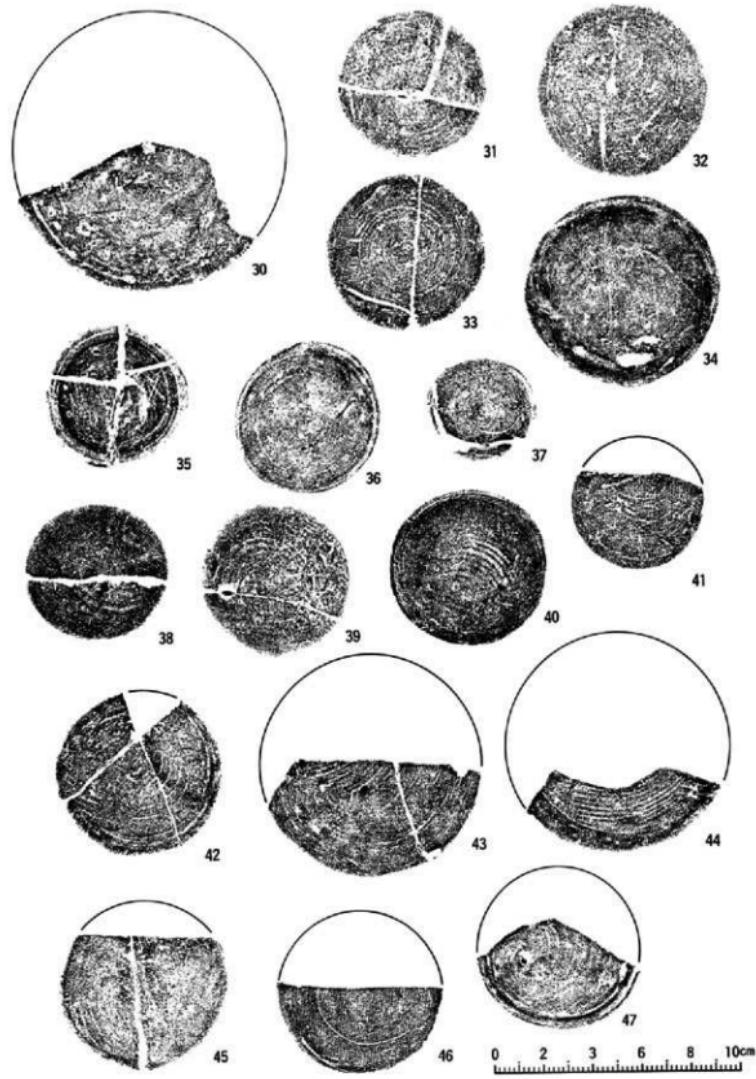
	切り離しA	切り離しB	切り離しC	切り離しD	切り離しE	切り離しF
土 師 器 坏	SD3第5層	0点	0点	1点	7点	2点
	SD3第6層	0点	5点	2点	7点	13点
	SD3第7層	0点	4点	7点	0点	0点
	竪穴住居跡	0点	4点	5点	1点	2点
須 恵 器 坏	SD3第5層	0点	0点	0点	63点	0点
	SD3第6層	5点	2点	0点	18点	3点
	SD3第7層	29点	11点	0点	12点	1点
	竪穴住居跡	9点	7点	0点	5点	0点



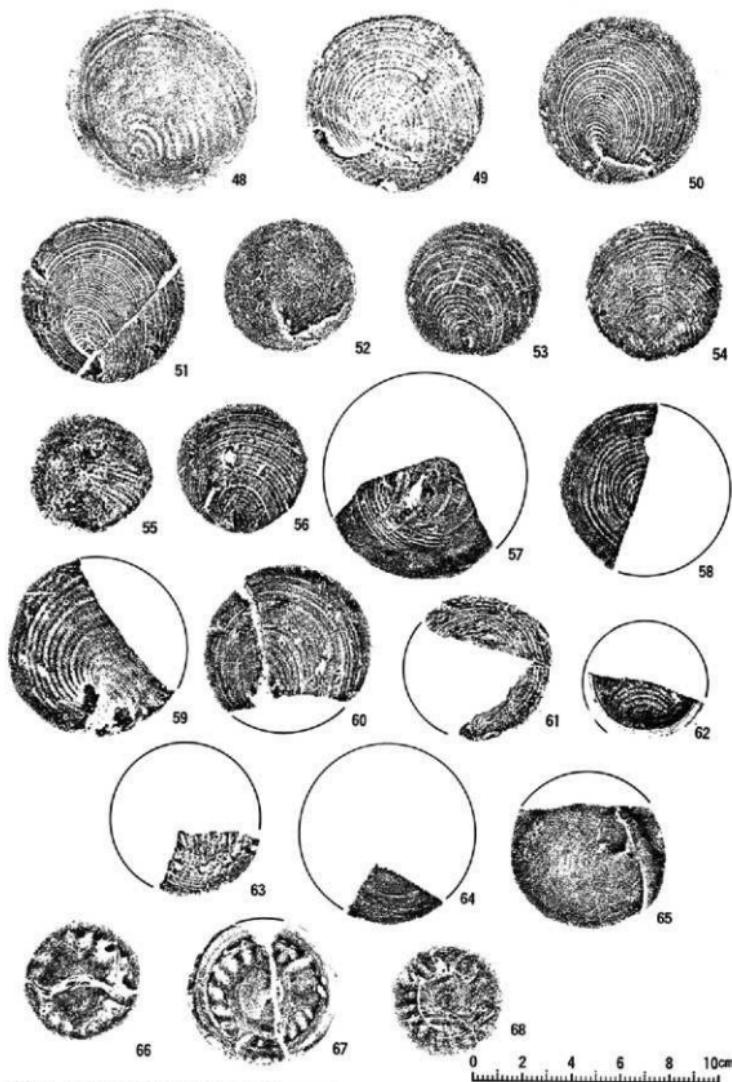
第22図 笹原遺跡出土土師器杯底部拓影図(1)



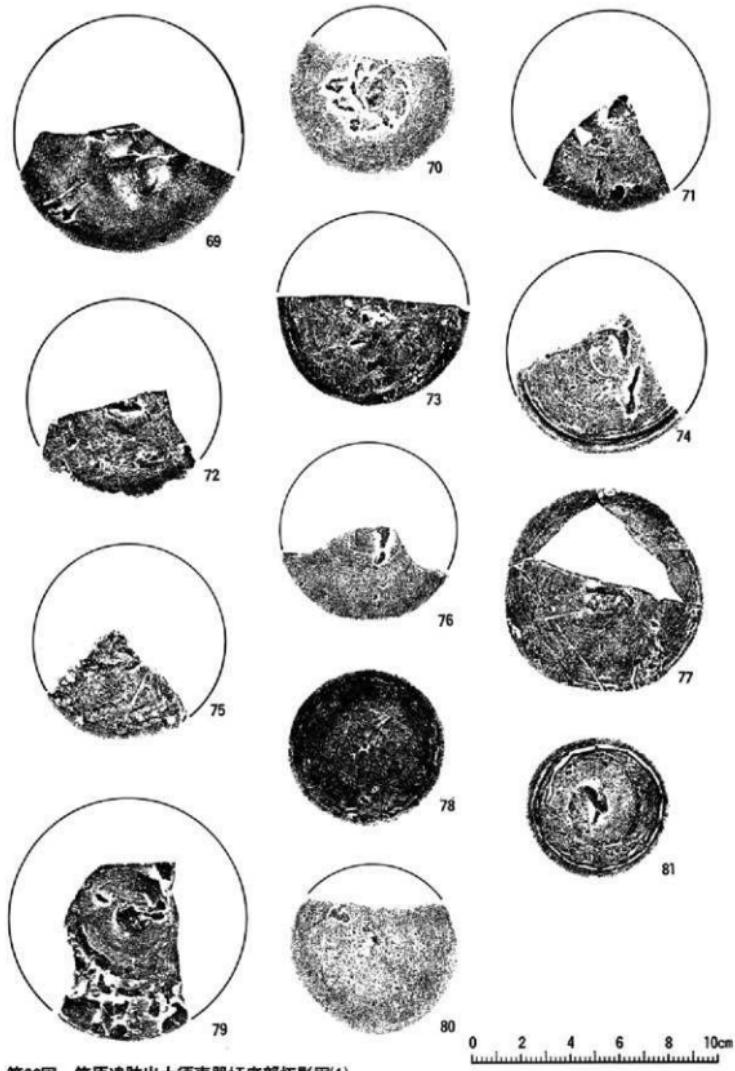
第23図 笹原遺跡出土土師器底底部拓影図(2)



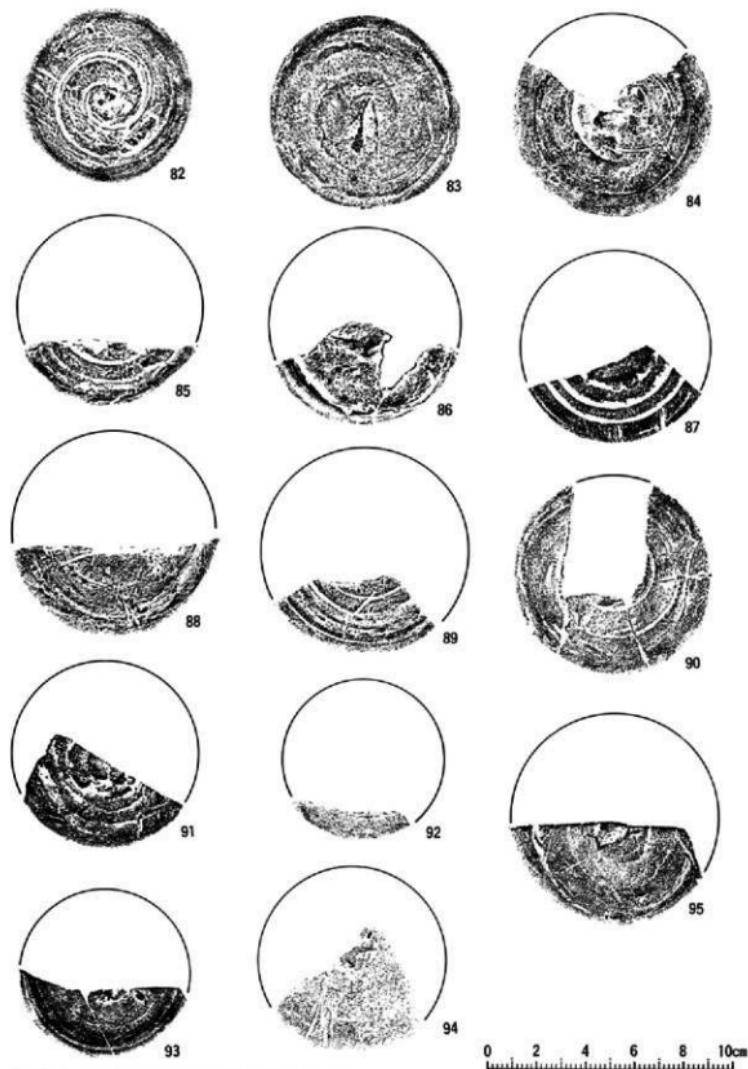
第24図 笥原遺跡出土土師器壺底部拓影図(3)



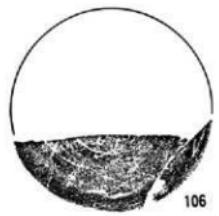
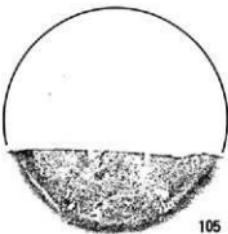
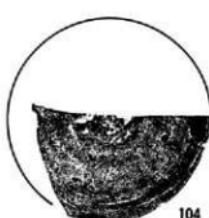
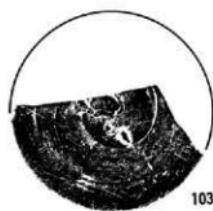
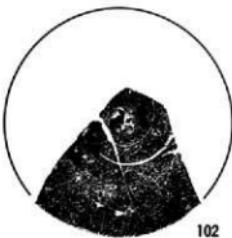
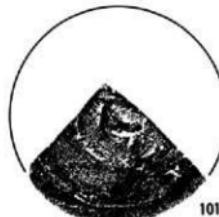
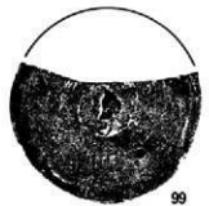
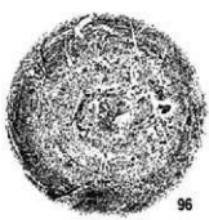
第25図 笹原遺跡出土土師器坏底部拓影図(4)



第26図 笹原遺跡出土須恵器・环底部拓影図(1)

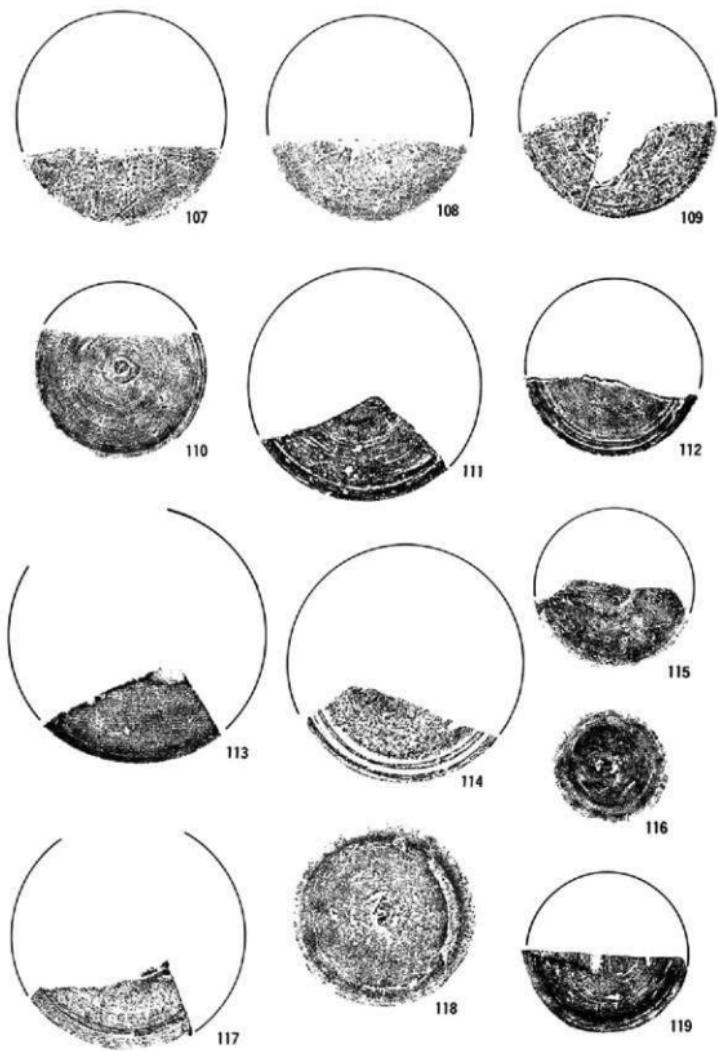


第27図 笹原遺跡出土須恵器壺底部拓影図(2)

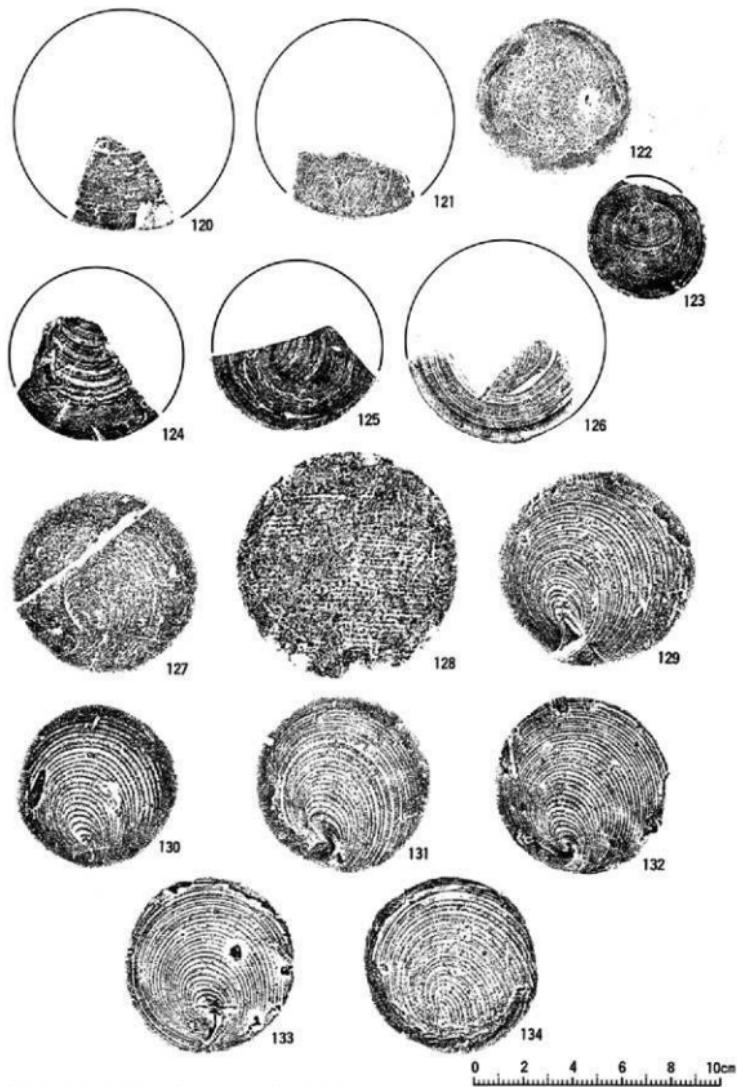


0 2 4 6 8 10cm

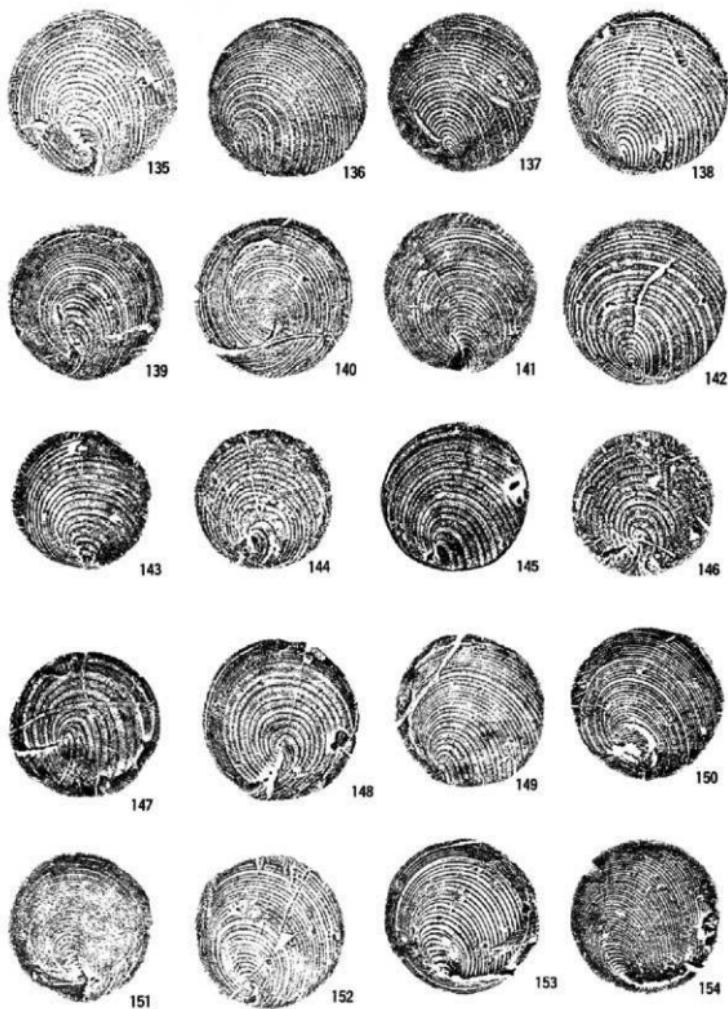
第28圖 笹原遺跡出土須恵器环底部拓影図(3)



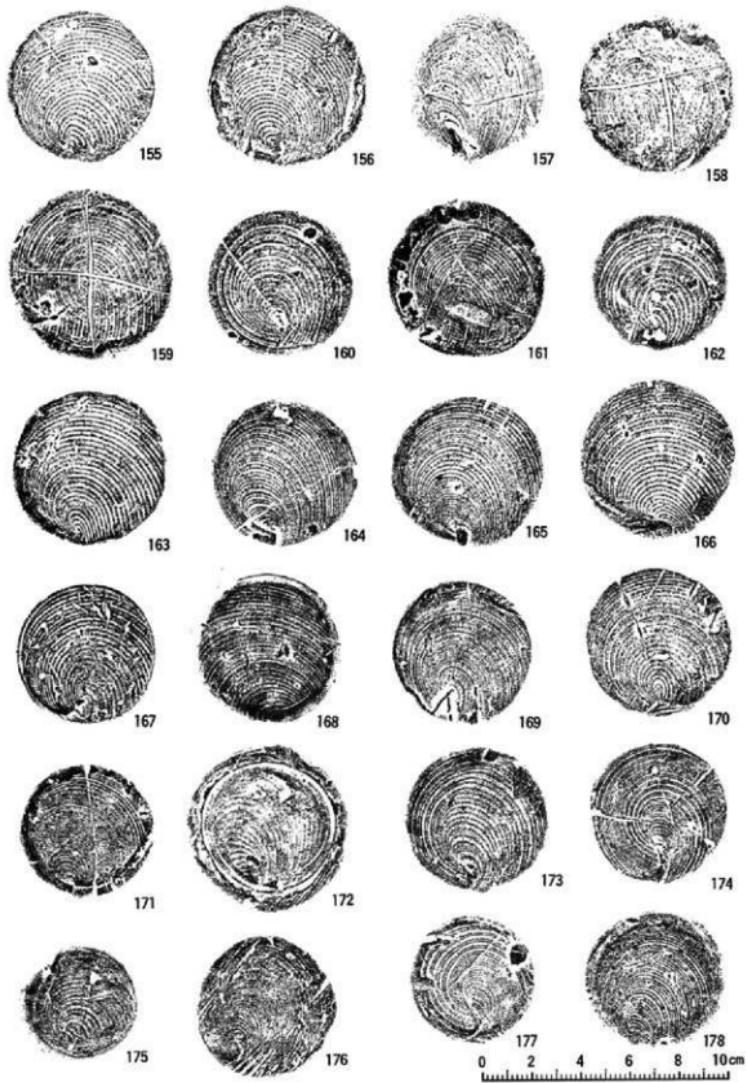
第29図 笹原遺跡出土須恵器壺底部拓影図(4)



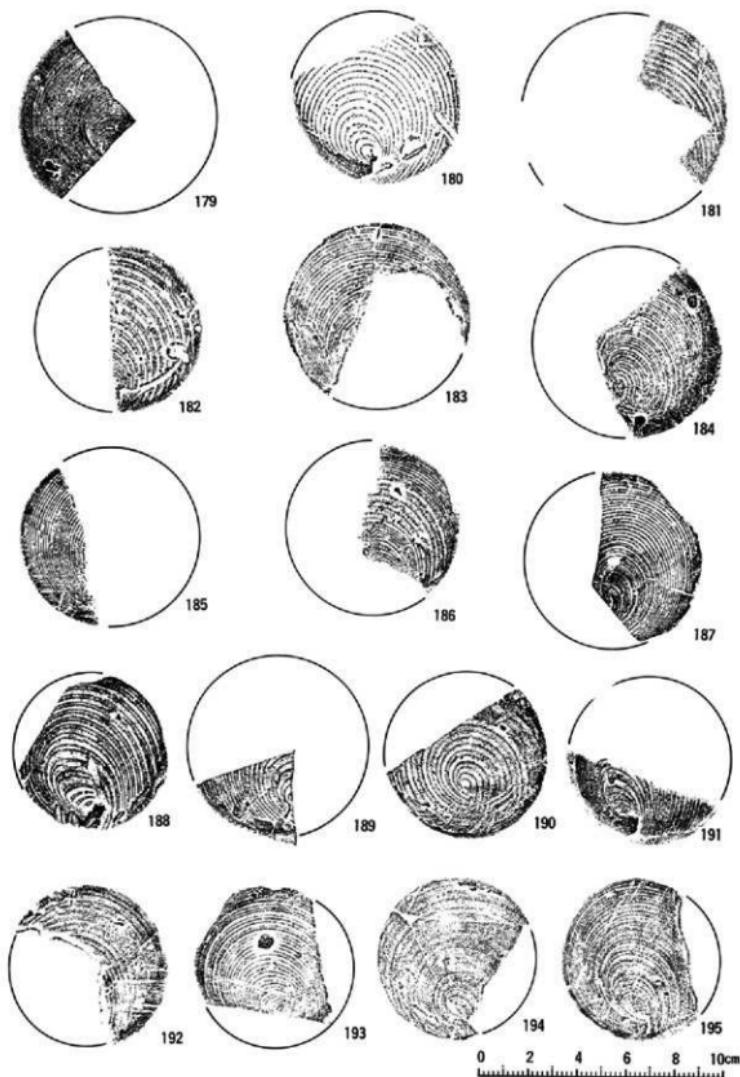
第30図 笹原遺跡出土須恵器壺底部拓影図(5)



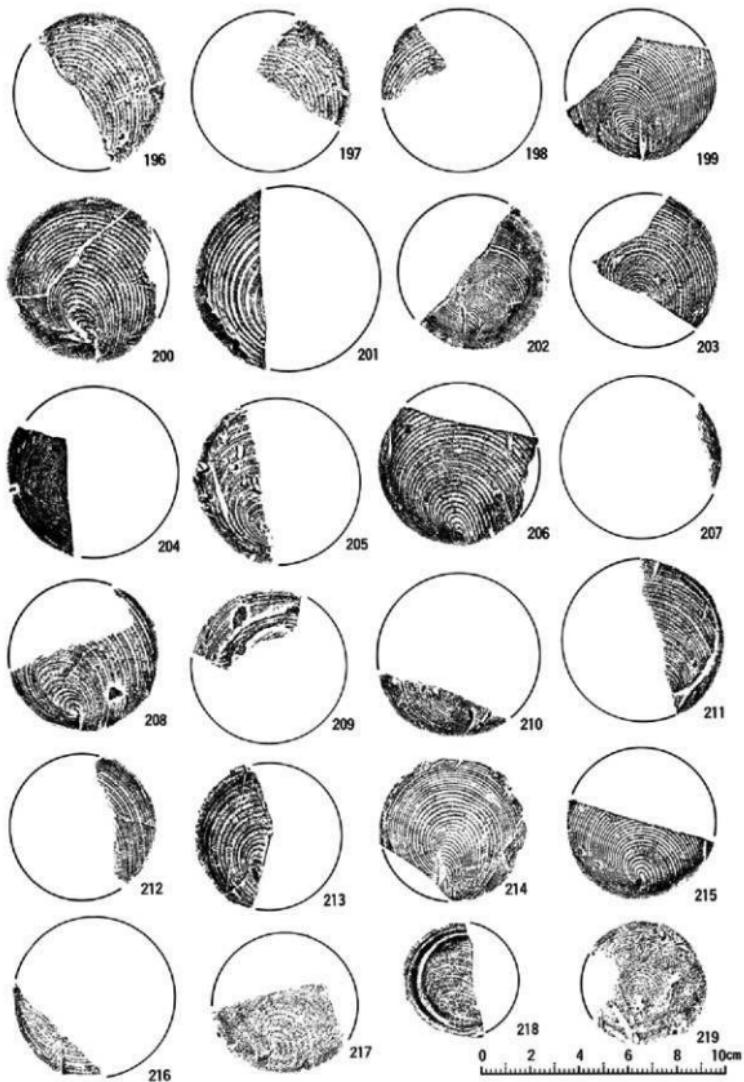
第31図 笹原遺跡出土須恵器底底部拓影図(6)



第32図 笹原遺跡出土須恵器底面部影写図(7)



第33図 佐原遺跡出土須恵器底部拓影図(8)



第34図 笹原遺跡出土須器底底部拓影(9)

第8表 笹原遺跡環形土器底部切り離し分類表

通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製	通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製
1	185	SD3-E	7	C	31	91	SD3-C	6	E
2	200	SD3-4	7	C	32	284	SD3-2	6	E
3	207	SD3-C	6	C	33	285	SD3-1	6	E
4	188	ST5		C	34		SD3-1	6	E
5	282	SD3-C	7	C	35	191	SD3-C	5	E
6	187	ST5		C	36		SD3-B	6	E
7	294	SD7	5	C	37	196	SD3-B	5	E
8		SD3-E	7	C	38		SD3-A	6	E
9	204	SD3-B	7	C	39	186	SD3-C	6	E
10		SD3-B	7	C	40		SD3-4	6	E
11	210	ST8		C	41	293	SD3-C	6	E
12	211	SD3-C	7	C	42	107	ST5		E
13	a116	ST5		C	43		SD3-C	6	E
14	b116	ST5		C	44		SD3-4	6	E
15		SD3-A	7	F	45	120	SK14		E
16	195	SD3-E	7	F	46	283	SD3-B	6	E
17	137	ST1		B	47		SD3-B	6	E
18		SD3-A	6	B	48	206	SD3-C	6	D
19		SD3-1	7	B	49	80	SD3-C	6	D
20	201	SD3-1	7	B	50		SD3-C	6	D
21	189	SD3-2	5	B	51	31	SD3-C	6	D
22	291	SD3-D	6	B	52	90	SD3-G	5	D
23	292	SD3-B	6	B	53		SD3-C	5	D
24	208	SD3-A	7	B	54	206	SD3-C	6	D
25	209	SD3-2	7	B	55	197	ST1		D
26	a113	ST5		B	56	50	SD3-C	6	D
27	b113	ST5		B	57		SD3-C	6	D
28	115	ST5		B	58		44-72G	II	D
29	203	SD3-B	6	B	59	220	SD4-A	II	D
30		SD3-C	6	B	60	287	SD3-B	5	D

通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製	通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製
61	215	SD3-G	5	D	91		SD3-A	7	A
62	212	SD3-G	5	D	92	48	SD3-C	7	A
63	213	32-56G	II	D	93		SD3-E	6	A
64	289	SD3-2	5	D	94	101	SD3-C	7	A
65	288	SD3-C	5	D	95		SD3-C	7	A
66	202	SD3-C	5	菊花状痕	96	75	SD3-B	7	A
67	29	SD3-A	5	菊花状痕	97	21	SD3-C	7	A
68	51	SD3-G	5	菊花状痕	98	219	SD3-C	7	A
69	151	S T 1		A	99		SD3-I	7	A
70	67	SD3-A	6	A	100	149	S T 1		A
71		SD3-C	6	A	101		SD3-I	7	A
72		SD3-I	7	A	102		SD3-A	7	A
73		SD3-I	7	A	103		SD3-H	7	A
74	40	SD3-A	7	A	104		SD3-C	7	A
75	43	SD3-A	7	A	105	147	S T 1		A
76	172	S T 5		A	106		SD3-B	7	A
77	33	SD3-C	7	A	107	70	SD3-C	7	B
78		SD3-C	7	A	108	57	SD3-A	7	B
79		SD3-C	7	A	109	71	SD3-D	7	B
80	168	S T 5		A	110	175	SD3-4	7	B
81	183	SD3-C	6	A	111		SD3-I	7	B
82	64	SD3-A	6	A	112	63	SD3-C	7	B
83	45	SD3-B	7	A	113	146	S T 1		B
84	54	SD3-D	7	A	114	102	SD3-B	7	B
85	44	SD3-C	7	A	115	88	SD3-C	7	B
86	85	SD3-A	7	A	116	170	S T 8		B
87		SD3-D	7	A	117	221	S T 8		B
88	66	SD3-A	7	A	118	62	S T 3-A	7	B
89	96	SD3-C	7	A	119		30-62G		B
90	92	SD3-B	7	A	120	86	SD3-B	7	B

通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製	通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製
121	100	SD3-A	6	B	151	27	SD3-C	5	D
122	26	SD3-C	7	B	152	22	SD3-C	5	D
123		SD3-C	6	E	153		SD3-A	5	D
124		SD3-B	6	E	154		SD3-B	5	D
125		SD3-4	7	E	155	34	SD3-C	5	D
126	56	SD3-C	6	E	156	89	SD3-E	5	D
127	32	SD3-1	7	D	157	3	SD3-D	5	D
128	166	ST8	7	D	158	182	SD3-C	5	D
129	163	SD3-C	7	D	159	184	SD3-A	6	D
130	38	SD3-C	5	D	160	24	SD3-F	7	D
131	74	SD3-A	7	D	161		SD3-A	7	D
132	176	SD3-G	5	D	162	173	ST5		D
133	181	SD3-C	5	D	163	47	SD3-B	6	D
134	164	SD3-2	7	D	164	4	SD3-E	6	D
135	53	SD3-A	5	D	165	10	SD3-A	7	D
136		SD3-C	5	D	166	169	SD3-2	6	D
137		SD3-C	5	D	167	105	SD3-1	5	D
138	177	SD3-2	5	D	168	16	SD3-E	5	D
139	7	SD3-C	5	D	169	8	SD3-C	5	D
140	179	SD3-2	5	D	170	28	SD3-C	5	D
141	79	SD3-A	6	D	171	20	SD3-C	5	D
142	19	SD3-G	5	D	172	174	SD3-1	5	D
143	171	ST5-E	5	D	173	104	SD3-C	5	D
144	35	SD3-C	5	D	174	25	SD3-D	6	D
145		SD3-C	5	D	175	167	SD3-C	5	D
146	37	SD3-C	6	D	176	11	SD3-A	5	D
147		SD3-C	5	D	177	9	SD3-C	5	D
148		SD3-B	5	D	178	178	SD3-2	5	D
149	83	SD3-C	5	D	179		SD3-E	5	D
150	30	SD3-C	5	D	180	58	SD3-A	5	D

通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製	通しNo	遺物No	出土地区	層位	底部切り離し調製
181	103	SD3-B	7	D	211	59	SD3-C	5	D
182	2	SD3-B	7	D	212	95	SD3-A	5	D
183	17	SD3-C	5	D	213	79	SD3-A	6	D
184	60	SD3-A	7	D	214	180	SD3-2	5	D
185	13	SD3-E	6	D	215		SD3-A	5	D
186	46	SD3-A	6	D	216	65	SD3-F	6	D
187	217	SD3-C	5	D	217	72	SD3-C	5	D
188		SD3-D	5	D	218	106	ST5		D
189	118	SD4	3	D	219	12	SD3-E	5	D
190		SD3-B	5	D					
191	42	SD3-B	5	D					
192	15	SD3-F	5	D					
193	218	SD3-A	5	D					
194	18	SD3-C	6	D					
195	61	SD3-C	5	D					
196	176	SD3-G	5	D					
197	99	SD3-D	7	D					
198	55	SD3-B	5	D					
199		SD3-C	5	D					
200	49	SD3-C	5	D					
201		SD3-I	5	D					
202	77	SD3-F	5	D					
203	129	ST7		D					
204		SD3-B	5	D					
205	78	SD3-C	6	D					
206		SD3-B	5	D					
207	6	SD3-C	5	D					
208	5	SD3-C	6	D					
209	14	SD3-E	5	D					
210	68	SD3-D	5	D					

※土師器坏 1~68

※須恵器坏 69~219

5. 各土器群の細別

A群1類土器 [1・49・64・66・67]

S T 1, S T 7, S T 9 内各1点と S D 3 第7層から2点検出されている。いずれもロクロを使用しない土師器坏のグループで、底部が丸味をもつのが特徴である。器形は口縁部が外反気味に張り、胴下部と内面上部に棱を有するもの A群1a類66と深い椀状を有する中で胴上部に棱をなすもの A群1b類 49・67, 浅い椀状をなし口辺部が窄まるもの A群1c類 1 の3形態があり、調整は外面調整を横ナデ^fから手持ちケズリ e¹～e³とヘラ調製 c²・ヘラミガキ a¹～a³を施したものが多く、内面はヘラミガキ a¹～a³の他に横位ヘラ調整 c² 67や横位のヘラナデ 64もある。

A群2類土器 [2・25・33・57・74]

S T 1, S T 5, S T 8, S D 3 第7層から検出されている。ロクロ形成を有する内黒土師器のグループで、底部が広く、器高の低い特徴を示す。外面調整はロクロ形成^f後に底辺部を手持ちヘラケズリ e²を施すもの 33・57・74と回転ヘラケズリ g を施すもの 2・25の二通がある。内面調整は横位・斜位のヘラミガキ a²・a³を主体にし、2の様に a⁵・a⁷を用いたものもある。底部切り離しは、切り離し(B)が4点と主体をなし、57のみが切り離し(C)をなす。底部内面調整も e⁸が多く他に e⁶ 1点がみられる。

A群3類 [80・81]

S D 3 の第6層と第7層に各1点の2点が認められている。A群2類に高台を付けた様な底部の広い内黒土師器高台坏で、外面調整をロクロナデ^fから底辺部を回転ヘラケズリ g をなす 80もみられ、内面調整はヘラミガキを中心には 80 は a³+a²+a⁷+a¹, 81 は a²+a³+a⁹ の順で行なっている。底部内面調整は 80 が e⁷・81 が e⁶ を有し、切り離しは、80 が切り離し(D)・81 が切り離し(E)を示している。

A群4類 [71・72・79・88・90]

S D 3 の第6層、第7層出土でいずれも内黒土師器坏のグループである。口縁がゆるく外反し、胴部がゆるやかにふくらむのを特徴とし、内面調整は f¹ から斜位のヘラナデ b³を有する 71・79 とヘラミガキ a¹～a³・a⁷・a⁹を中心で調整をなす 72・88・90 に分けられ、外面調整は、f¹ 後に底辺部を回転ヘラケズリ g や手持ちのヘラケズリ e²・e³を用いている。底部切り離しは 71・72 が切り離し(C)・88・89 が切り離し、79 が切り離し(D)と多様で底内面調整も、e⁴・e⁶・e⁸・m²・m³と一定した調整手法はみられない。

A群5類 [26～32・68・69・73・82・83・85・87・89]

A群4類と基本的には同様であるが、胴部のふくらみをもたずして底部からの立ち上りが口縁部付近でゆるやかに外反するのを特徴とする。S T 5 内7点、S D 3 第7層4点、同6層4点の計15点が認められている。外面調整は f¹ 後に回転ヘラケズリ g を底辺部に施す 26・28・83・85・

87・89と手持ちヘラケズリe¹～e³をもって調整をなす27・29・30・32・68・69・73に分けられる。

内面調整は磨滅のため不明な68・73・83・87を除くと横位のヘラミガキa⁷を中心[a¹・a²・a³・a⁸・a⁹・a¹⁰]のヘラミガキを用いている。底部の切り離しは切り離し(C)を有するもの6点、切り離し(B)を有するもの2点、切り離し(E)を有するもの3点、切り離し(F)を有するもの1点、不明3点と切り離し(C)をなすグループが多く存在する。

底部内面調整は不明7点を除くとSD3出土坏がe¹2点、e⁸・e⁹1点、住居内出土坏がm³2点、m²2点と調整手法に異りを示している。

A群6類 [70・76・77・78・84・86]

これまで述べた内黒土師器坏類の仲間では器高が高く、底部の比較的小さいグループであり、底辺から口縁部にかけてゆるやかに曲しながら内傾する特徴がある。SD3の第6層からまとまって検出され、84のみが第7層出土である。内面調整はヘラミガキa¹～a¹⁰によって丹念に調整を施すものが多く、76の様にヘラ調整c²をなすものもある。底部内面調整はm¹・m²を呈するもの70・76・78とe²・e¹・e³を呈するもの77・84・85に分けられる。

底部の切り離しは、切り離し(B～D)と多様である中において、切り離し(D)を有するグループが含まれているのが注目される。

A群7類 [91～93]

土師器坏を一括して本類とした。外内面ともロクロによるf¹の調整を施し、底辺部に手持ちのヘラケズリe²をもつ91と同回転ヘラケズリgをもつ93がある。器形は91が高い器高をなす外反気味の坏で、92・93はA群13類に類似する。底部切り離しは91が切り離し(C)、92・93が切り離し(D)を呈している。

A群8類 [94～99]

器高が高く、外に微傾を有しながら広がる内黒土師器高台坏のグループを一括した。いずれもSD3の第5層検出によるものであり、調整と器形からさらに2のグループに細別することが可能である。

最初は94～96・99の坏類で、高台部分が細く尖りをなしており、調整は外面をロクロ成形からf¹と96の様に回転ヘラケズリgをもつものである。内面調整は横位のヘラミガキを主体としたa²・a⁷をなし、同底面調整は横位ならびに斜位のヘラミガキa³・a⁴を用いてある。底面調整は、e²・m³・m⁴・切り離しを切り離し(E・D)と菊花状痕各1点がみられた。A群8a類とする。

後の97・98は外面をf¹・内面を明瞭なロクロナデf¹の調整を施したA群8b類であり、切り離しを切り離し(D)と菊花状痕をなす二者がみられる。

A群9類 [3・100～103]

器高の低い皿状の坏類を本類とした。3を除く他はSD3の第5層出土で、新しい要素を含ん

でいる。器形は口辺部が太く外反し、高台をもつ101・102 A群9a類と口辺部が平坦状に曲する100 A群9b類、楕状を有する3・A群9c類に細分される。

調整は外面を3が横位のナデe²から底辺部を手持ちケズリe²、内面を横位のf²で仕上げている。100は外面をf⁴、内面をヘラミガキa²・a³・a⁷を有し、101は底内面調整に多いe¹を全体に行なっている。

A群10類 [14・23・24]

土器の両面を黒炭化処理を施した両黒土器を一括して本類とする。両黒土器は蓋、取手環、高台环、各1点がいずれもS T 1内より認められている。蓋は外内面を連続した横位のa⁹で調整し、高台环は後述するA群19類に類似する胴部に棱をもつのを特徴とする。外面調整は横位のナデf¹と高台部分の接合位を横位のヘラミガキa²・内面を横位のナデf²を施した後に横位のa⁹を行っている。両者はS T 1の北壁よりの床面から一括した状況で検出されたものである。

14の取手高台环は外面調整を横位のナデf²から横位のヘラミガキa⁷・同a⁹を行い、内面は横位のヘラミガキa²の後に斜位のa³を用いて丹念に磨き込んでいる。

A群11類 [4～8・12・59・60]

器壁が厚く、器高、底径の比が少ない須恵器环類を11類とする。S T 1内より6点、S T 8内より2点とすべて竪穴住居内からの検出であった。

底部切り離しを(A)ないし(B)を有するものが多く、切り離し(A)を有するものは4・59の2点、切り離しBを有するものは4～7・12・60の6点と後者の(B)をなすものが大半を占め、またロクロによるf¹後に底部部を回転ヘラケズリgを施す5・6・60も後者に含まれていることも重要である。

A群12類 [11・105～115・119・122・123・124・135]

先に内黒土器のA群2類と分けた器形に類似する須恵器环類を12類とする。器高の比が他の环類と比較して少なく、その為に底径が広くなる特徴をなす。

底部の切り離しは回転ヘラ切り無調整の切り離し(A)を呈するものが大半をなし、明瞭な器壁の観察において、111・115の环より輪重痕跡を確認することができた。^④

また切り離し(B)を有する119・121・123・124・135の5点のうち121は底辺部を手指ちヘラケズリe²を施してあり、笛原遺跡の須恵器环の仲間では唯一の例となる^⑤。

11・115と119を除く他はS D 3の第7層の検出で第7層を代表する須恵器類と考えられる。

A群13類 [36～39]

底辺部から底部から底部にかけてゆるやかな曲線を保ち、口縁にかけて外曲するグループである。S T 5内のみからの検出であり、基本的にはA群12類に加えた方が妥当と考えるが一応区別した。ロクロ成形はなめらかに調製し、底部切り離しはいずれも切り離し(A)によるものである。

A群14類 [139～150・152・158]

切り離し(D)を有する須恵器壺のグループである。底部からゆるやかに曲しながら立ち上る器形と底部が広面を有するのが本類の特徴であり、さらに口辺が内傾気味に呈する139・140・141・146とやや外曲する142・143～150・152・158の二種類のタイプに分けられる。前者を14a類、後者を14b類としておく。

調整はロクロによる^{f1}が殆んどで、まれに147の内面に回転ヘラケズリgを有する1点と外面の底辺部に回転ヘラケズリgを施すのも含まれている。

層位はSD3の第7層を中心に139～150の12点、第6層から152・158の2点が認められた。

A群15類 [151・153～157・159～166]

第6層から検出された須恵器壺のグループである。すべて切り離し(D)を有し、器形より次の2形態に細分される。初めに15a類とする153～157・162・164は口縁部が外に微傾するグループであり、さらに153・154・157の様に口辺が厚味を帯び、底辺部がくびれて立ち上るものと口辺部がうすくすることによって外反を表す様な155・158が含まれている。

後の15b類とした151・159～161・165・166・195は底辺部から微曲を有しながら外へ立ち上がるグループである。

A群16類 [167～169・174・180～186・191～194・196～198・205・210]

SD3の第5層内からまとめて検出された。すべて切り離し(D)をなす本類は第6層、第7層出土の同じ(D)の切り離しをもつ須恵器と比べ、底部が小さく、器高長の特徴がみられる。底辺部がA群15a類の仲間と同様な底辺部がわずかにくびれるのが多く、胴部もゆるやかに曲線をもちながら口縁部で外反するのを基本形態としている。器壁は3mm～4.5mmと平均化しており、外面と内面の一部にはロクロ成形による水引成形痕が著しく発達している。

A群17類 [170～173・175～179・182・187～190・193・211]

本類も16類と同じ第5層からの検出によるもので、16類の様に底辺部がくびれて立ち上るものではなく、底辺部が丸味を帯び、そのままゆるやかに立ち上るA群14類のプロポーションに近いグループである。ただし、底部が狭く器高長で内外面にロクロ成形痕の発達が存在する特徴はA群16類に比例している。

A群18類 [212～219]

SD3第5層から検出された土器群に赤褐色を呈した赤焼土器7点がある。外内面は須恵器壺のA群16類、同17類と同様にロクロ成形（水引痕）が顕著に見られ、器形は212・215がA群16類213・214・216がA群17類217・218がA群14類にそれぞれ類似している。切り離し技法はいずれも切り離し(D)である。

A群19類 [10・45・118・125～128・130・131・234]

胴部に棱を有する須恵器高台壺である。ST1・ST4とSD3第7層からの検出であり、第

7層を代表する壺と考えられる。胴下部に呈する稜は回転ヘラケズリgの調整を施すことによって、鋭角な張り出し部分を呈している。また稜下から底部にのびる直線と底部から張り出す高台部分がほぼ直角になすのも本類の特徴である。

底部切り離しは、ヘラを主体にした切り離し(A)10・45と切り離し(B)125～128がある。

A群20類 [9・116・117・120・129・132～134・136・202]

A群19類と同様に胴下部に稜を呈するグループであるが、全体的に器高長で回転ヘラケズリgを施すものは含まれていない。器形状から本類は次の3類に細分される。

20a類、器高が著しく高く、稜を有する部分が底辺部に下っているのが特徴である。S T 1 内9とSD 3 内第7層120・132、第6層116第5層202の5点がある。

20b類、19類と外形上はまったく類するが、全体的に小さく、回転ヘラケズリgを有していないことが異なる。SD 3 第7層より117・129・133・136の4点がみられる。

20c類、胴部の張り出しがゆるやかで、A群14類に高台を付けた感じの須恵器高台壺である。SD 3 第6層より134の1点が認められた。

底部の切り離しは切り離し(A)を有するもの116・117・120・切り離しBを有するもの129・133・136・切り離し(E)を有するもの134・切り離し(D)を有するもの9・202と多様である。

A群21類 [138]

SD 3 第6層より1点検出されている。小形高台壺切り離し(D)に舌状の取手を接合した須恵器取手壺であり、接合後に取手箇所を手持ちヘラケズリを用いて丹念に調整を施している。

A群22類 [199～201・203・204]

底部が小さく、器高長の大形須恵器高台壺で、高台が垂直に立ち上るのを特徴とする。口辺部が僅かに外曲しA群8類の土師器壺に類似している。切り離しはすべて切り離し(D)である。

B群1類 [15]

ツマミ(鉢)部分が失っている須恵器蓋形土器である。曲線を有する上端から直角に垂下し、鋭角な稜を有している。外面調製は上部を回転ヘラケズリgで施し、口辺部をロクロナデf⁴、内面は同じf⁴を用いてある。S T 1 内に1点検出されている。

B群2類 [16・17・19・20・22・206・209]

口辺部がくの字状に内傾する須恵器蓋類を本類とした。ツマミ(鉢)接合部から平坦にのびる肩が(天井部)が角を有するものが特徴的で、接合付近から肩(天井部)にかけて回転ヘラケズリgを施す16・17・209もある206・209がSD36層内から出土し、他はS T 1 よりの検出であり付け高台状のツマミ(鉢)をもつ16以外は殆んどツマミ(鉢)が欠損している。

B群3類 [18・21・58]

ツマミ(鉢)部分を除くと全体が丸味を有するのを本類とした。口唇部も他の蓋類にはみられ

ない丸味をもつ、21を除く18・58の両者はツマミ（鉢）付近を回転ヘラケズリgで調整を示している。18・21がS T 1内、58がS T 8とすべて住居内から認められたものである。

B群4類 [207・208]

S D 3第7層から検出されたもので、これまでの蓋類と比較して器高が低く、口唇部がぐの字状に内反し回転ヘラケズリgを呈するのを特徴としている。

B群5類 [46・103・232・233]

土師器の蓋類をまとめて本類とした。46はS T 5内、232はS T 6内P 32、233はS T 4内S K 8、103はS D 3第6層より検出され、103を除く他はすべて欠損品である。

調整は外面をロクロナデf⁴から回転ヘラケズリgをなし、内面調整は黒炭化処理を施しているが磨滅のため、明確にできないが、103によると横位のヘラミガキa²と斜位のヘラミガキa³を行なっている。

C群1類 [238~240]

土師器の変形（もしくは壺形の可能性もある）に分類した胴上部から口縁部までの破片によるもので、胴部が球形状にふくらみ、頭部から口縁部にかけて強く外反する器形とみられ、238の様に頭部が立ち上ってから外反するのもある。

調整は外面を縦位のハケメd¹と斜位のハケメd³から横位のナデf²をもって施し、内面は238が横位のナデf²、239は口縁部を横位のハケメd²、胴部を斜位のハケメd³で調整し、240は口縁部を横位のナデf²後に横位のヘラ調整c²・c³、胴部を回転ハケメhを有している。

238・240がS D 3第7層、239がS T 5内S K 15から検出されている。

C群2類 [48・43・51]

胴部がわずかにふくらみをなし、口縁部が大きく外反する變形土器であり、S T 5内とS T 6内から検出した。48は胴下半部を失なった變形土器で外面を斜位のヘラ調整c²を行なってから横位のナデを口縁部に施している。内面は口縁を横位のナデf²、胴部を横位のハケメd²で行い部分的に縦のユビナデkをなす。

51は變形土器を焼成後に穿孔して瓶としたものでS T 6内のカマド付近から検出されたものである。ゆるやか外曲する口縁から、胴部で直下し、下胴部から同じ様に内傾して底部へ進む器形である。外面調整は横位のナデf²を施してから縦位のハケメd¹を丹念に行い、最後に一部縦位のヘラミガキa²を有している。内面は最初、輪重の接合部を調整するための横位のヘラ調整c²を施し、その後に斜位ないし縦位のヘラミガキa²・a³・a⁷それに斜位のヘラナデb³を有する。口縁部は最後に横位のナデf²から横位のヘラ調整c²をなす。

C群3類 [42・228・229・235~237]

口縁部が大きく外反し、胴部が直角に近く垂下するのを本類とした。228・229が造構外のグリ

ット出土、235～237がS D 3第5層、42がS T 5内の検出によるものである。調整は内外面調整をロクロナデ^{f1}をなすものが多く、235の様に内面をロクロナデ^{f1}から回転ハケメk、外面をロクロナデ^{f1}後に回転ハケメ調整kさらに縦位のヘラ調整c¹を施するものもある。

42は唯一の完形変形土器であり、外面調整を横位のナデ^{f2}から縦位のヘラケズリc¹を胴下半部を施こし、最後に底辺部を横位のヘラケズリe¹で仕上てる。内面調整も横位のナデ^{f2}から初まり斜位のハケメを胴下半部中心に施する。43は口縁部のみの破片で、外面を横位のナデ^{f2}から縦位ハケメd¹、内面を横位のナデ^{f2}後に横位のハケメd²を最後に行なっている。

C群4類 [52・56・227・254] [拓図220～237・240]

須恵器壺形土器のグループである。S D 3第5層から出土した227以外は破片によるものが殆どである。叩き目の手法より次の4のグループに分けられる。

4 a類は細長い格子目状の叩き目を呈し、内面を同心円状のあて痕を示すもの227・拓図235・242・両者ともS D 3第6層による。

唯一の完形変形土器は口頭部が「く」字状に外口し、口唇部が外に折り曲って、内面に一条の凹線を置く。胴部は上端を大きく張らせ、底部にむけて斜傾してそのままゆるやかに円底を有している。叩き目は細長い格子目状を斜位に上から下に施し、さらに縦位状にと不規則に繰り返して最後に底辺部を縦位に行なっている。器壁は全体的にうすく、胴部で0.3～0.6、口縁で1.2～1.5、底部最厚1.8cmを測る。52の口縁片も本器同様破片とみられる。

4 b類は縄文原体とアジロ状等をあて痕とし、外面は板目状の叩き目を縦位に施する。拓図232・233・236の3点がある。S D 3第7層からの検出による。

4 c類は234の一点があり、内外面に板目状による格子目状叩き目を斜走し、表面は叩き目に横位のナデ^{f3}をもって消している。

4 d類として櫛目状工具を用いて施文したと考えられる波状文と多条平行線状の組み合せを有するグループである。いずれも口縁部に施したものであり、明確な波状をなす200～222・224・226・227・229・230とゆるやかな波状を呈する223・225・231がある。また口唇部の状況も一条の稜線が横走するもの220・222と「く」状に張り出す221・223～226があり、櫛目状平行線の代りに凹線を有した220もみられる。前者(波状)をなすものはS D 3第7層のものが多くゆるい波状を施したものはS D 3第6層からによるものであった。

D群1類 [50・251～253]

付け高台を有する須恵器壺形土器をまとめ本類とした。いずれも胴部から下半部にかけての破片であり、253は回転ハケメhを外面に施し、内面をロクロナデ^{f4}で仕上げている。252は底部を指で引っぱる様にして高台状にしたものであり、接合部を指ナデkによって縦位に調整している。内面はログロナデ^{f4}を有し、251も同様でS D 3第6層内から認められたものである。

50は胴上部を大きく張る壺をなし、表面を縦位の叩き目を施した後に底辺部を回転ヘラナデで消し、胴部もロクロナデ^{f4}で叩き目を消している。

D群2類 [243~250]

胴部が球形状にふっくらとした球形状を有する須恵器壺形土器の一群である。残念ながら頭部から口縁部が欠損したものが殆んどで、明確に形状を示すことはできないが、248~250の様な長頭を設するものとみられる。外面調製はロクロナデ^{f4}を主体にし、その後、胴部から底辺部の外側調整を横位のヘラケズリe²と縦位のヘラミガキを有する244や底辺部に横位のヘラケズリe²をもつ245それに胴部から底辺部にかけて縦位のヘラケズリe¹を施する236が含まれている。一方内面は247の様に頭部と胴部の接合部を横位のヘラケズリe²で調整をなす247と底辺部を斜位のヘラ調整を有する他はロクロナデ^{f4}によるものであった。SD3からの検内によるものであり244・246・248~250が第7層、243・247が第6層、245が第5層出土である。

D群3類 [241・242]

表面を格子目状の叩き目を施し、その後回転ヘラ調整もしくはロクロナデ^{f4}によって消しを行なった須恵器壺の仲間である。241は胴部がゆるやかな球形状を示すもので、口頭部が欠損しているが、接合部の状況からして、まっすぐ立ちるものとみられる。242はST6の50と同様に胴上部が肩を張る長頭壺とみられる。両者ともSD3第7層から認められたものである。

D群4類

ST8の東壁床面から検出された水瓶である。口辺部が欠損を呈する他は完全な形で残っており、頭部に二条、胴部に二条、頭部と胴部の接合位に二条の凹線を配している。器形は球形状の胴部から細長い長頭が立ち上り、底部に高台をもち、現高15.8cm、胴部最大径10.6cm、底部6.1cmを有する。

E群1類 [54・55・65・231]

土師器の器台を本類とする。ST7より2点、ST9より1点の3点とグリット内1点が検出されすべて欠損品である。前者は器台の脚部片であり、器台が低く、脚の口唇が外に曲するのを特徴とし、外面調整を横位のナデ^{f2}と65はナデ^{f2}の後に横位のヘラミガキa²を呈している。内面調整は65が横位ナデ^{f2}・55が回転ヘラケズリgから縦位のナデ^{f2}と指ナデkを施している。54はシボリ後に横位ヘラミガキa²を加え、最後に横位のヘラ調整c²を脚口唇に行なっている。

後者の231は高坏とした方が妥当と思われる。磨滅が著しくて調整は不明であるが脚の接合部に縦位のヘラケズリe¹が残っている。

E群2類 [53・104・225]

その他の土器をまとめたものであり、53・225は鉢形を有する器形と推測され、53は下半部、225は上半部を失なっている。調整は53が内外面ともに横位のナデ^{f2}からヘラミガキを加えてお

り、外面を横位a⁶・内面を横位a⁷となっている。S T 7 内出土。

225は内黒を有する底部片で S D 7 内から認められた。底部は切り離しCを有し『大』のヘラ書を残している。調整は外面を斜位と横位のヘラ調整c²・c³、内面をヘラミガキによるa⁸をなす。

104は S D 3 の第 7 層より検出された小形手づくね土器である。口唇が外てゆるく内で強く曲し、胴部はわずかにふくらみをもたせて底部を上げ底状に凹ませている。調整は外反を横位のナデfから底辺部を斜位のハケメd²を下から上に施する。内面も同様で横ナデf²後に口縁を横位のハケメd、胴上部を斜位のハケメd³を用いて底面は木葉痕を残している。

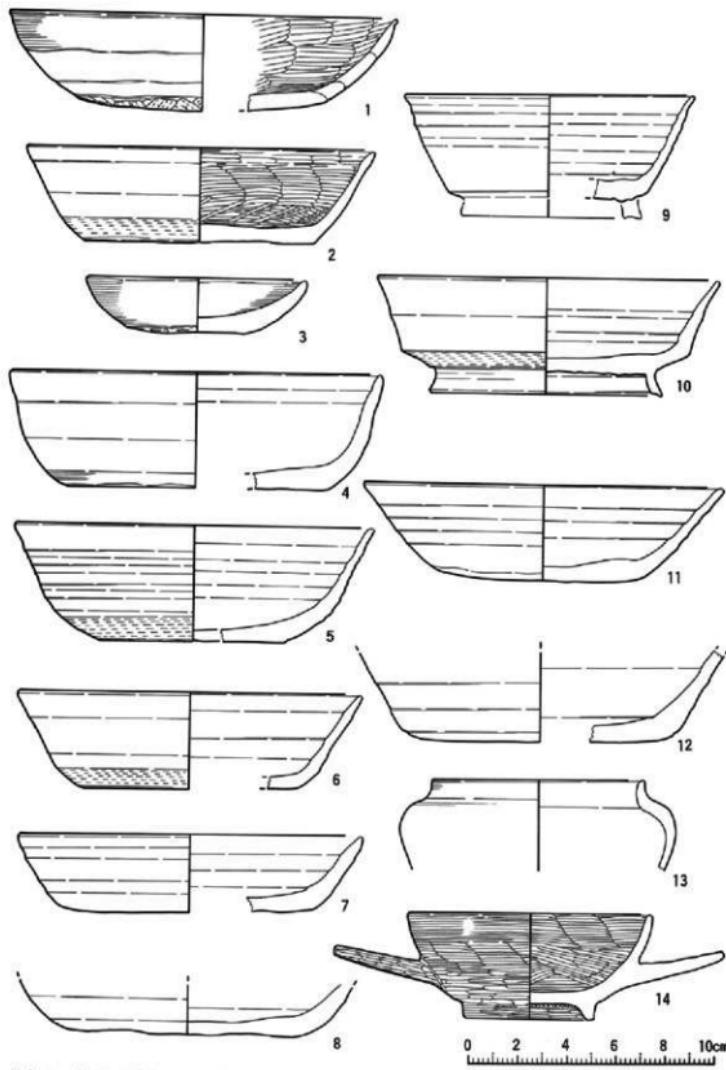
E群3類 [63・137]

円面硯のグループである。笛原遺跡からは S D 7、S D 3、S T 8 内の造構より各 1 点の円面硯 3 点が出土している。その中で S D 7 内から検出されたものは小破片であるため図化は難しく、省略する。S D 3 の円面硯は第 7 層の中でも上層の方から検出したものである。脚はゆるやかな外曲を描いて広がってから口唇部が「く」字状に内曲するB群2類の蓋に大変似ている特徴をもつ。脚部にはやや中央位に 1.7cm の円形状有孔を配し、円孔との間にヘラ書による小の葉状文様を施している。上端の「うみ」に面した箇所は切り離しA後に回転ヘラケズリg を用いて整え、2段の付け高台を置く。焼成は良質で円孔は 6 単位であった。

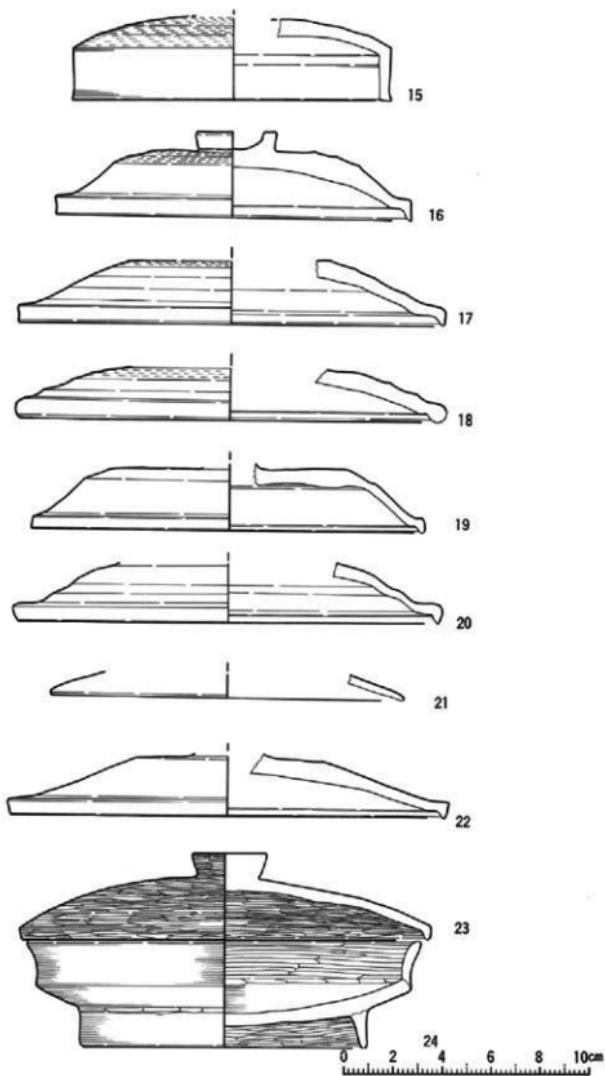
S T 8 の円面硯は脚をもたない磁器硯に類する特徴をなし、口径 9.5cm、高さ(現高)1.8cm で、切り離しを静止糸切りによるものである。ちなみに静止糸切りによるものは本器以外に検出されていない。

E群4類 [226]

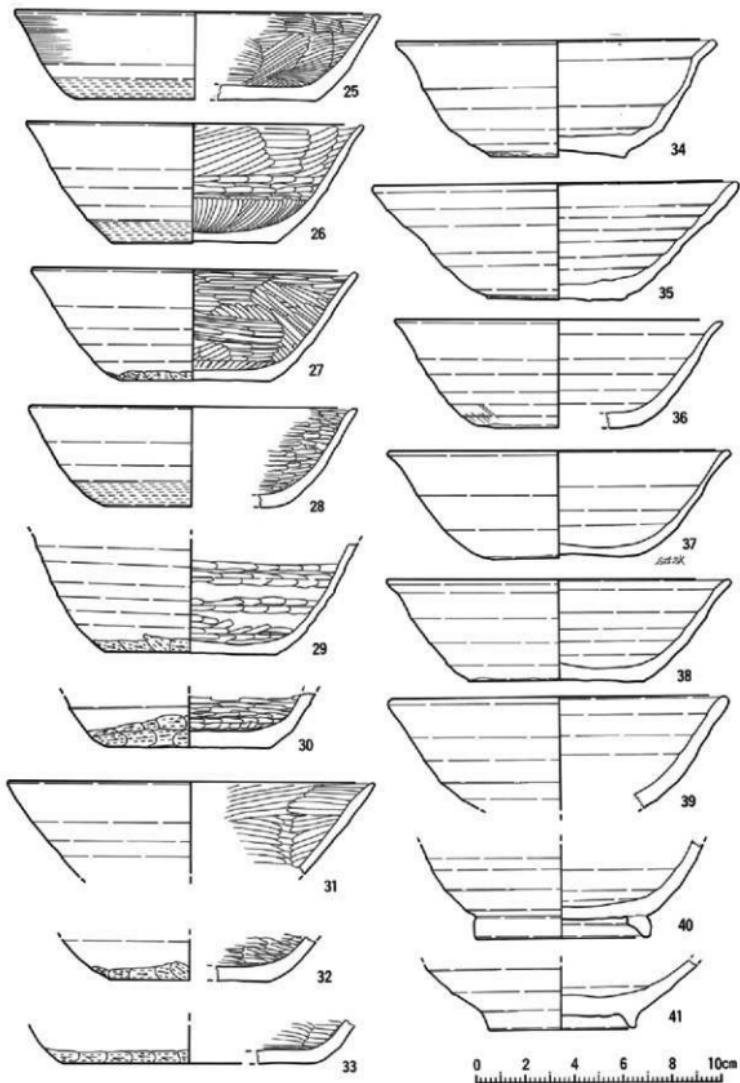
S D 7 内より検出された須恵器鍋 1 点がある。



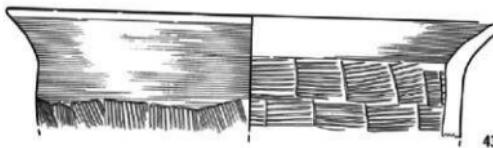
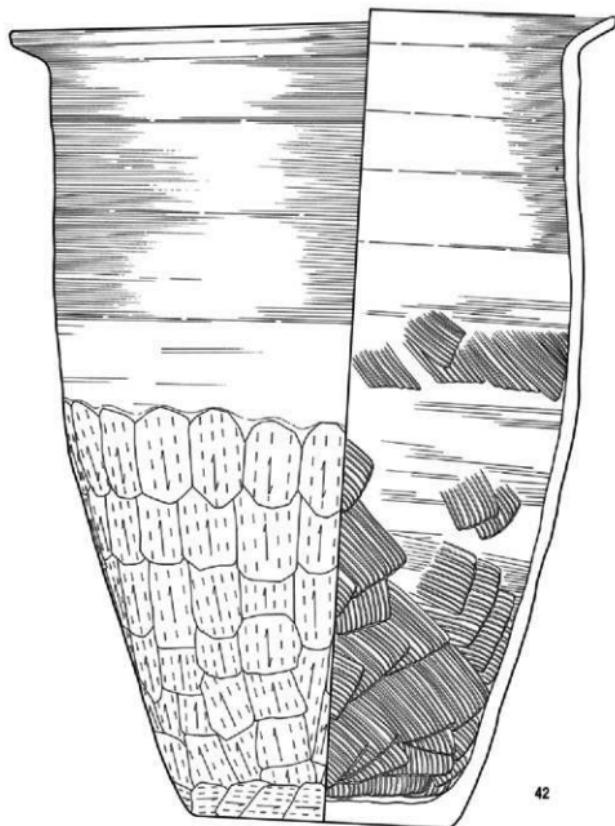
第35図 笹原遺跡出土土器実測図(1)



第36図 笹原遺跡出土土器実測図(2)

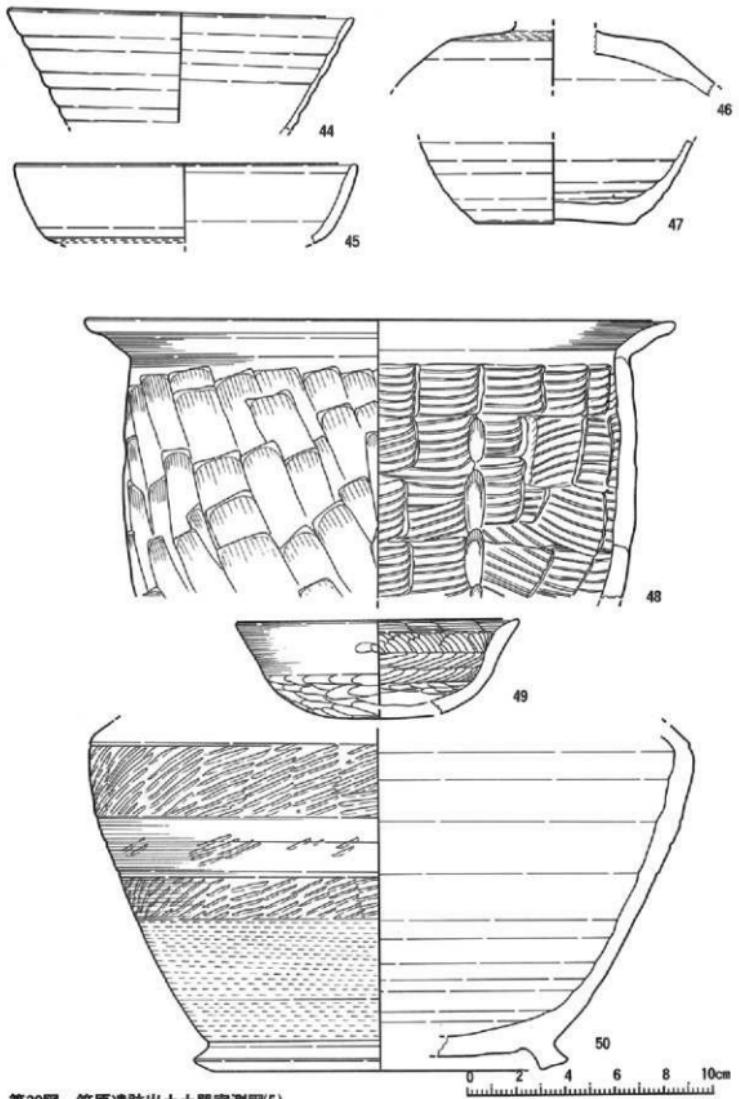


第37図 笹原遺跡出土土器実測図(3)

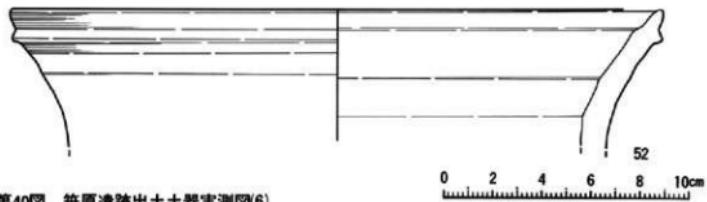
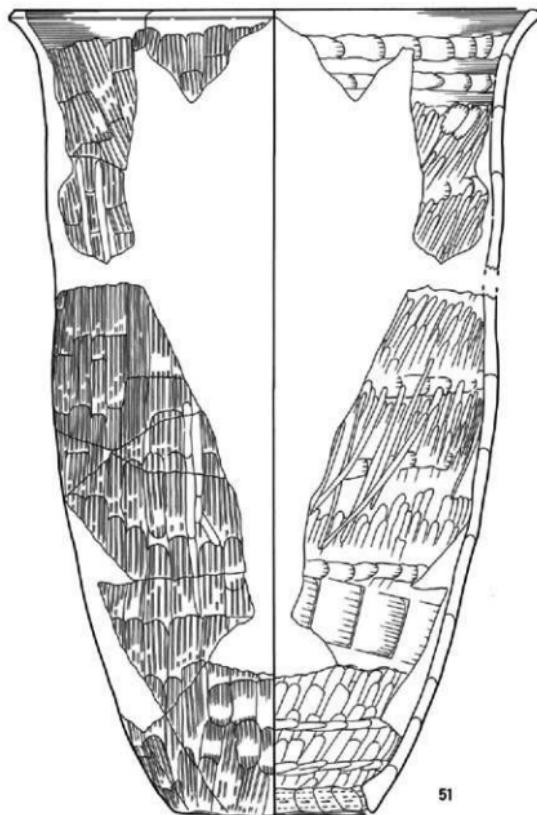


0 2 4 6 8 10cm

第38図 笹原遺跡出土土器実測図(4)



第39図 笹原遺跡出土土器実測図(5)



第40図 笹原遺跡出土土器実測図(6)